
一人のサムライ@関西

尺取虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人のサムライ@関西

【Zコード】

N7173Y

【作者名】

尺取虫

【あらすじ】

農民達は、過去の前例に倣い侍を雇おうとする。しかし、村には米はなく、

粟と稗だけで、当然、そんな状態では侍は雇えない。しかし、たまたま、呼びかけに応じた侍がいた。だが、その侍が次に雇うことを決めたのは、「お坊さん」だった。

一人の侍とけつたいたな仲間達が奇策を持つて、時流を創る！ なんやねん。関西風、時代劇っぽい、戦記ものです。

（自サイトにある小説「一人の侍」を関西弁訳しました。
（「7人の侍」のパロディに近いところもありますが、内容は全く
違うのです。）

第1章 稲穂村からのお便り（前書き）

この小説にててくる、所在地、言語、人物は全て架空のものです。
モデルにした物、人もいないです。

第1章 稲穂村からのお便り

それは、一人のサムライが生きた人生の軌跡。

侍が闊歩してこるほど昔のことだった。

古河茅の国 稲穂村は、野伏による略奪に悩まされていた。そこで悲壮な顔をした村民達が集まって、対処を話し合っていたのだった。

村の長老「大おじじ」と「金一じい」を中心にして座っておった。

この村を率いているのは、「蛇田 壮平」通称「そつべい」、「岡澤 直良」通称「なおじ」、築地 幾宏 通称「つづきー」である。

そうべい「凶作なのは、領主様への年貢でとられるだけとられちまつた。

それなのに、今度はまた野伏や。もひ、首くぐるしかねえ。」「なおよじ」「どうせ死ぬなら、なんで野伏をやつてしまわねえんや。ああ、戦だ！」

「…」

「…それは無理な話や。勝てるわけへんではおまへん

か。」

なおよし…「なんだとーお前から先にやつてやるうかーつひゃーー。
お前の家族全員、野伏に連れ去られたやないか。
それでも、そないな」とを叫つか!」

「よしーおひは戦つかー」「やめろー勝てるわけがなー」

村民皆、ざわづく。

大おじじ…「ちーとばかしまでー静まれー。静まれ。わじがまだ小
さこ頃の話やつた。

ある村で、侍を7人雇つて野伏を退治したひつ話を聞
いたことがある。

やつ、侍を雇うのやー」

そうべー…「(・・・・・)ノーん、たむりこを雇う。大おじじ、
でもざつやつて。」

金一じこ…「その村では、米を腹にいっぱい食わせてやると釣つたそ
うや。

前例から考えて、我が村でも7人くらい雇えばなんと
やろかるかの?」

つひゃー…「それは、米があればの話やつて。

野伏と年貢で我が村には米はほとんど無い。」

なおよし…「やつてみんなきやわからんやるーわてはせやるがーー侍雇つ
て戦やるがーー」

大おじじ…「そりやな。手をこまねいていては状況は悪化するだけや。

米はだせんが、稗くらいならある。

そうべい・なおよし、つつきー、町へ行つて侍を雇つて来い…！」

大きな町の中、途方にくれる三人組。人の多さに飲まれてしまつている。。

なおよし・「さあ、声かけまくろつぜ。なにグズグズしとるんだ！」

つつきー・「そないなことしたら、「無礼者ー」と切り捨てられて終わりや。」

そうべい・「そういうわけや。簡単にはいかん。

それに人物も確かめへんと、後で困ることになる。」

なおよし・「ちえ。そないなことわかつてゐぜ。で、侍のあてとかありまへんのか？」

そうべい・「残念ながら、まるつきしないのや。

これから、知り合いの住職に話を聞いて、ほんで賭場と宿屋に行く。」

つつきー…「そないな」と、働いてくれる奇特な奴が見つかるのかいな。

「こないな損な話。」

つつきーの言葉のせいで、一同落ち込みながら移動を開始した。

お寺の住職に会いに行く途中、そつ、その人物に遭遇してしまつことになったのだ。

なりす者…「おい、お前。金だせよ。」

ないなり、その刀でも置いていけ！でなきやぶつ殺すぞー。」

堅そうな侍…「はい。要求はわかりたんや。」

ななりす者…「抜けた」とこつてると、ただやすまないぞー…早く金を

出せ。」

堅そうな侍…「あんはん様の行為により、

ウチが反撃する危険性は当然考慮していらっしゃった上で

なされるとんこやね。確認させてもらひますけれど、

ちゃんと、命賭けていひしきるのやね？」

なりす者…「こいつは、気が狂つとるのか？」

わけは金をだせつていつとるんじやけー。

何でもええから早く…！」

堅そうな侍…「わかりましたんや。あんはん様がそのつもりなら、それに見合つた対処をせななりまへん。

ウチも命を惜しみまへん。それが、道理やうからな。

」

力シャリ、刀を抜く。

なりす者は刀を奪おうとするが、一歩遅く届かない。

なりす者は…「しもた。やばい奴に声かけてしもつた。逃げるぞ…！」

なりす者は、脱兎のように逃げていった。

そう、それがそうべい・なおよし、つつきーが森島様を最初にみた事件やつた。

なおよし…「あこつ、強じのやうか?なりすものが逃げていつたぞ。

声かけようぜ。」

つつきー…「大丈夫か?髭はやして、なんかやばそうな風貌やけど。急に斬られたりせんのか?」

そうべい…「いや、頑固そつで、堅そうな顔してるやないか。
ああこいつ手合には、理屈で攻めれば説得できるよ。ま
かしとけ。」

そうべい…「あの、お侍様〜。

今、稻穂村の稗を宣伝しておつまじて、

稗の餅を配つとつますんや。」

堅そううな侍：「やうか、そつか。それはありがたい。腹が減つとつ
たのや。」

むしゃむしゃ。

やうべい：「お侍様。お代は？」

堅そううな侍：「貴様。金をとるのか。聞いてないぞ。……それでなん
がやうか。」

やうべい：「我が村を野伏から守つて欲しいのや。もうひん、
食事はウチで持ちまんねんし、稗と粟を
腹いっぱいだしまんねん。」

堅そううな侍：「わしゃ。食べとひな。」

やうべい：「お口上がりになられたやないか！」

堅そううな侍：「食べてへんもん。」

やうべい：「お侍様。強い敵を倒し、一つの村を助けてくれまへん
なよし・「お侍様。強い敵を倒し、一つの村を助けてくれまへん
なよし・「そないな詐欺みたいな方法で、怒らせたひどいするん
や。」の馬鹿！

なよし・「お侍様。強い敵を倒し、一つの村を助けてくれまへん

かね。

や。

どうか、一緒に戦つとつただけまへんか？

皆、明日が見えなくて毎日毎晩晝年中泣いとるんや。」

堅そうな侍：「強い敵、嫌や。」

なおよし：「そこをなんとか。人助けだと思つて協力しどうただけまへんか？」

堅そうな侍：「社会の構造的欠陥と村周辺の警備体制の不備が根底にある。」

野伏退治しても、野伏はいなくなへん。やから、なにもならへん。」

つつきー：「やめようわ。

こないな人を雇つても役に立たないやううわ。逆に迷惑になる。」

森島様：「なんだと。」

つつきー：「だつてそうやないか。この腰抜け侍め。お前なんかに何がわかる。

耐えてる人間の何がわかる。

貴様みたいな腰抜けがきても、野伏に殺されるだけや。

「

堅そうな侍：（Ｔ　Ｔ）

堅かつた侍：「へへ（。。。）へ 引を抜けた。その仕事引を受けた！」

「」の森島論正にだけくんことなどなあんもなー！」

そつべー、なおよし、つひめー・「えー。ほんまに困るわ。お侍様
～」
「」

そつべー・「それで、森島様。じつしまつか。

これからお寺の住職に会って行こうと細かい話のやうだ。

森島様：「それでよからう。」

道を歩ことると尺八を吹いとる虚無僧がいた。

森島様：「お寺に行かへんでも虚無僧なり、あやじりこらでまおまへんか。」

なんか、つてがあるかもしれまへん。」
「」

森島様：「それや、わてが話しつけてくる。」

森島様：「稲穂村で、稗と栗をどれだけでもお布施したいとの申し出があるのやが、

貴殿さえよろしければ、受け取りに来てはくれへんか。

できれば、数ヶ

月村に滞在しどつただきたい。」

虚無僧：「そうか。それはありがたい。」

森島様：「信者からのお布施やから、断つたりせんよね。絶対だよ。」

○(〃^ ^〃)○

森島様：「お~い。みんな。虚無僧雇つたけれど、ええよね。」

そうべい、なおよし、つづやー…「…。」

虚無僧：「わしは、道覚と申す。」

いひして、道覚様が仲間に加わった。

なおよし…「お侍様。お寺の住職を勧誘したりしたら黙田や。」

ウチらは、侍を雇いたいんや。無駄に雇えん。」

森島様：「クッ

つづき…「とはいっても、長老の話だと、あと5人は雇わなきやな。侍を。」

そつべい…「前例主義者の長老のことや。」

道覚様雇つたことだけでもつむせこで。」

一同：ため息

そつべい：「着いたぞ。」の寺や。」

森島様：「極楽大空寺か。百姓の間では絶大な人気らしいな。」
（。、。）「

つつきー：「何ぞ悪い予感がする。まあえ。中に入ろうわ。」

道覚様：「ウチも入つてよろしいのやうか？」

お寺の中、森島、農民3人、道覚様、住職が座つている。

住職：「事情はわかつた。野伏に困つとると。それで、どうすればええ。」

そつべい：「まず、ご領主様にこのことをお伝え願いたい。」

ほんで、侍を紹介していただきたい。」

住職：「ワイが思うには、ご領主様はなあんもなさりまへんやうわ。」

稻穂村は、国境に近く、下手に対処すればお隣の積藁の国を刺激してしまうわ。侍なら紹介できるが。」

そつべい：「そつやうな。じゃ、その侍に会つてみまんねん。それだけでも、十分ありがたい。」

住職は手紙と地図を描いてそつべいに渡す。

そつべこ…「ここ」の近所やね。すぐに行つてみまんねん。」

「ほんで、森島様と道覚様はここで待つてておくんは

れ。」

森島様：「なんでやねんや。仲間はずれや。酷いではおまへんか。わしがいくと、上手くいかへんと想つとるのや。」

「ひさのむんにまへん。」つつわー…「いや、お侍様のお手を煩わせるわけにはこまへんの

で。」

森島様：「そつかのうへ

そつべい…なおよし、つつきー、が出かけ、寺には住職、森島様、道覚様だけが座つている。

住職：「ここ」の虚無僧は…？」

森島様：「ウチが雇つことに決めたんや。」

住職：「思惑でもあるのか？それとも虚無僧から寺に迷惑をさすの？」

森島様：「いや、僧侶である」とに意義があるのや。僧侶が村にいれば、野伏達も村に攻撃していくやうにならぬで

む。」

「

住職：「せうやな。でも虚無僧殿だけでは、ちびっ子と抑止力としては弱いのうわ。

どや、うひの弟子を一人送りうか。

我が寺の僧侶を傷つけるようなことは、野伏もせんやうつ

わ。

信者が多いこの十地で、そないなことをしては生きてこけんからな。」

森島様：「それはありがたい。

では、念仏が上手い僧侶を一人雇わせていただきたい。

」

住職：「うむ。それなら、恵向がいる。

念仏の歌唱力だけは若手で一番や。住職命令で派遣しようわ。」

こつして、恵向が、一行に加わった。

」

そのころ、住職に紹介してもらった場所で、

そつべい：「なおよじ、つつきーは紹介された侍を探していた。

そつべい：「確かにここのはずなんやけビ。侍が住んでこるようなところはないな。」

「

つつきー：「どう見ても農家ではおまへんか。居候しておひつじ

か
？
」

なおよし：「とりあえず」この家の人に、尋ねてみよつわ。」

ガラガラ。

そうべい：「すいまへん。」（）に峯澤政之助様ちう、お侍様がいらっしゃると聞いたんやが、」

老婆：「峯澤様なら、裏の畠や〜」

「よかつた。どうやらここにいらっしゃるようや。」
「そつべい：「それはありがたい。すぐに行つてみまんねん。」

3人組。裏庭へ移動。

峯澤様： ジャキーン。 ジャキーン。

つき一：「あれはなんや。畑を耕しとるのか？」

なよし・「馬鹿な」とをこうでね。こ。

「のや。

「練習中に申し訳ない。極楽大空寺の住職の紹介で、参上つかまつた。なおよしと申すものや。」

峯澤様：「なにか事情がありげだな。 煙で一汗かいて腹減ったとこ
だし、

一緒に夕飯でも食べながら話しようか。」

そういういふこの人ええひとや。やつとまともな人に会えた（

峯澤様：「刀で畠仕事はつかれるのうわ。」

野菜も手に入る
剣の稽古をしながら

卷二十一

なむへ

峯澤政之助宅にて、質素な夕飯を囲みながら、

峯澤様：「話はよ～くわかった。やけど、その話には残念やけど、

卷之三

「つひあー..「なんだやねん。ねこちゃんを出すの?」ハサナニツハサナリ」とか。」

峰澤様……「ニセ、やつではおれへんが、

○○○

「 もう、どうせ落ち込むでしょ、へん。

卷之三

あいつなら、必ず、助けになってくれるやつだ。

義侠心のあるやつやからな。

そういうい・「ありがと、い・まんねん。

夕飯まで」ちやうじとつただいて、」の恩は一生忘

れまへん。」

峯澤様：「いや、力になれなくてすまなかつた。

紹介した奴は、毎日毎晩壹年中この近くの船の渡し場に
あるから

いまからでも行くとええ。日が沈むと家に帰つてしまつ
からな。

ほれ、紹介状と地図ぢや。」

なおよし…「ありがと」ぜこまんねんわ。」

3人の農民が岸辺に佇む。

そうべい：「言われた通り、渡し場に来てみたが侍はいるのかの？」

井之川様：「おい、その3人。この川を渡るのか、
わたりまへんのかどつちや。」

そうべい：「いや、峯澤様ちう方に紹介された人を待つとるんや。

剣の腕がどエライ人がいるつてきいてきてみたんやけ
ど。」

井之川様：「お～。それはわてのことだぜ。

わては剣の腕で負けたことが無いからな。」

つつき…「いやいや。刀持つてへんし、船頭やから侍では無いで

しょ。」

船頭：「言ひてへんよひだな。やあ、わての櫂をさせへやる
のよ。」

鼻頭に一粒の飯粒をつたられ、硬直してくるなおよ。」、「」
（ ）

なおよし…「な、なんでおいらがいないな。」

船頭：「黙つとけ。ちびつとでも動いたら。死ぬぞ。オラッ、いく
ぞ！」

船頭は櫂を大きく振りかぶつて、なおよしに向かつた櫂を振りぬい
た。（ ）

ほんで！…！ 米粒だけが、なおよしの鼻の頭から離れ、飛んでい
つた。

そつべい…「お見事。 なおよし、そつ泣くな。」

つゝやー…「かつて、櫂で戦つた剣豪がいると聞いたことがあるが
…」

船頭：「ははつ。参つたか…！ わしは、この渡し場の鬼番長」と
井之川俊彰。や

「峯澤様の頼みとあらば、断れねえ。それで何の頼みや。」

寺に帰つたそつべい・なおよし・つつきーと井之川様。

森島様：「待ちくたびれた。その方が、今度の仲間か。」

井之川様：「おうわ。おれは井之川俊彰。シブロクヨンキューな。」

森島様：「上手くこつたみたいだな。わでも上手くこつた。」

つつきー：「… わても？」

森島様：「一人増えたから紹介する。恵向殿や。」

恵向様：「住職様からの『指名があり、

稲穂村にちーとの間修行にいくことになつたんや。恵向
や。」

森島様：「そりこつわけやから。」

つつきー：「やつぱりか…」

宿屋にて。そつべい、なおよし、
つつきーと森島様、道覚様、恵向様、井之川様が広間でくつろいで
いる。

森島様：「これで、4人集まつたわけや。ほなら、あと3人だな。」

井之川様：「せやけどダンさん、戦がわかる人間は、少ないぞ。これで戦えるのか？」

森島様：「それがしの手にかかるば、問題無い。」

つつきー：「その自信はどうだら？」

森島様：「數十回、小競り合いから大きな戦まで、参加してきたが、ウチが死んだことはいつぺんも無いからな。エッヘン。」

— 壁 — •) Y Y Y Y Y Y (。 A 。) — — —

恵向様：「なむあみだぶ、なむあみだぶ」

森島様：「あけてよ～。お外は嫌だよ～。」

そうべい：「森島様がいると話がややこしくなる。ちーとの間、追い出しどこうわ。」

道覚様：「それなりに考えはあるらしーのや。ウチや恵向様を雇つたのは、

野伏への心理的な備えとしてらしー。」

いかんせん、話が噛み合いまへんのが残念や。」

井之川様：「おいーそこの念佛僧！ つるさこから念佛をやめてくれ。」

つつかー…「それで、さうや。まともな侍は雇えるのか?」

井之川様：「まあ、見てな。わたくしは、まあ、明日のお楽しみや。」

強い奴を見つけてやるよ。」

なあに…「油代ももつたおひへん。もひ處で明日は備えよ。」

~~~~~ 消灯~~~~~

一方、その頃、森島倫正は宿屋の中をうろついていた。

森島様：「部屋を追こ出されちつたして、じつしよ。」「うるさい。」

宿屋の手代：「お侍様。じつせいかされたんやか?」

森島様：「（。。。）、「その手に持つとるものはなんだ…?」

「!」

宿屋の手代：「は、簞でござこまんねんわ。急にどなこされました

?」

森島様：「こやぢやうわ。それは刀だ…!その手に持つとるものはなんだ…?」

なんだ…?」

「!」

宿屋の手代：「こや、おそれもなく、簞でござこまんねん。」

（ ）

( 。。。。。 )

森島様：「いやちやうな。確認のため籌」とたたつきやー。

もうこつぺん説くが、その手に持つとるものはないだー！  
！—！—！」

まわひやん：「」れは、 刀 、 デージー まつ。 ャ（ ^—^ 、  
」

森島様：「やつたら、君は侍だよね。 ( < < < ) 「

まわひやん：「...まー」

森島様：「今、侍を雇いたいちう人がいるんや。

ちーとばかしこの宿屋の主人のトロに案内してくれんか。

「

朝日が差し込む部屋。

恵向様：「南無阿弥陀仏 なむあみだ。 なむあみだ。」

そつべい：「うひわ。朝から念仏はやめてくれ、隣の部屋から怒ら  
れる。」

なおよし：「ホンマに、うひわこな。 部屋の中なら小声で唱えれば  
ええのにー」

道覚様：「いや、あれこそ本物の念仏僧や。」

宿屋の手代：「でもビトライやね～こないなにひるやこの辺之三  
はんはよく眠つ

てまんねんね～。」

セツベイ：「セツセナ。氣持ちよきひつじて、お前は何者だ…。」

宿屋の手代：「ここの手代を務めております明津真之と申します。」

森島様：「つむ。通称 もわちやん だ。」

つつきー：「そないなに勝手に人を雇つては困るんや。」

森島様：「これで、5人になりよつたもん。7人まであと2人だも  
ん。」

「もわちやん…！ 君は侍だよね？」

またわやん：「(^\_ ^) ひつわ。 侍や。」

なおよし：「森島様に向をされたんや。宿屋の主人は許したのか？」

森島様：「ちやんと許可取つてある。」

この軟弱者を鍛えて返すといつたら、許可してくれた。

( < < ) 「

なおよし…「まさかやんはそれで、ええのか?人生狂わせれるが  
!」

森島様：「手に持つとるものは何だ!」

まさかやん…「( ( ( ( . 。 。 ) ) ) ) 刀。」

森島様：「それでよ!」

やつべい・なおよし・つつきー・森島様、道覚様、恵向様、  
井之川様、まさかやんの8人は、大通りを歩いとつた。

森島様：「この近くにビーライ戦術家がいるんだ。  
絵もすぐ上手いんだよ。図師昭輝といつ奴や。」

なおよし…「また、侍やないんや!」

森島様：「…」

やつべい…「なんでやねん、黙る。やっぱ侍やないのかー…そつな  
のかー!」

道覚様：「まあ、待て、武士でなくとも戦術家はいるやつだ。」

森島様：「着いたよ。」

そつべい：「立派なお宅だな。」

ガラガラ～

森島様：「森島がわざわざ攻めて来よつたよ～。将棋しよ～～。」

図師様：「久しづりやないか。我が将棋の友よ。さあ、早速将棋しようか。」

つつきー：「板の上の戦術家。（トートー）」

図師様：「つむ。要するに、村の用心棒をしろと。やつこいつらやな。」

森島様：「引き受けてくれるやろか。我がほつにはええ戦術家が必要なのや。」

図師様：「馬鹿なことを言つでない。ウチは絵師だし、軍学の「」とも知らん。」

森島様：「では、将棋の勝負で決めようではおまへんか。」

図師様：「では、ウチが勝つたら、お主が愛用しとる将棋の駒を1つ貰うぞ。」

「言つておくが、ウチは3連勝中だぞ。」

森島様：「将棋の駒一つか。よし、その勝負乗つたーー。」

図師様：「フフフ。

（これで、貧乏なあやつはウチの家でしか将棋ができなくなる。）

将棋仲間GETだぜ）」

力チリちつ音が部屋に響く、春だらうのに部屋に熱気が籠り暑い。

図師様：「アナグラ戦法できたか。ならば端を攻めるまでよ。」

力チリ

森島様：「堅い守りを崩せるやうか。

守りだけの森島と呼ばれた我が守りを見よ。」

力チリ

恵向様：「（それは、攻めを知りまへんと馬鹿にされどるのでは？）

」

図師様：「守りきれるやうか。

そないに困つては、玉の逃げ道も無いぞ。玉手。」

ピジョン

森島様：「むむ、、、、必殺一矢やぶ合返し。」

図師様：「そりやせるか……往生際が悪いぞ。」

もみくひぢやになる2人。それを止める井之川となおよし。

森島様：「図師よ！ 戦場をなんでやねん嫌がる。

部屋の中で想像上の動物を描いて、

それで何が得られた！？ どなたはんの役にたつた？

言つてみろ！ 図師様。戦場に来い。その日で戦場を視る

んだ！

お前も来い。」

図師様：「それと、この勝負なんの関係があるんだ！ 負けをみとめろ～！」

森島様：「お前は、この勝負に稻穂村の仕事と将棋の駒を賭けた。

勝負に「賭け」を入れた時点で、

この勝負は、盤上に閉じた勝負では無くなりよつたんや。それとも、そないなこともわからんと、駒を進めとつたのか！」

図師様：「そないなこと知りまへんよ！」

森島様：「そないなんやから、絵に魂がこもつまへんんや。

筆を取るとき、どないな気持ちやつた？

拙者は、この勝負をしどつたとき、

村の存亡を思つて、打つとつたんや。貴様は何だ！」

井之川様となおよしが、2人を引き剥がし、席に戻す。

つつきー：「まあまあ、落ち着いて。とりあえず、ケツまで打つて、勝負を決めてからでもよいのでは？」

「勝負を決めてからでもよいのでは？」

森島様：「…わかった。」

図師様：「…最初からそのつもつや。」

森島様が、自陣奥深くで眠つとる桂馬を手に取り、指した！

力チリ

森島様：「王手。」

図師様：「おい、今のはダメやう！…桂馬はそないなに跳ねないや  
う…！」

森島様：「そつ怒るな。桂馬の上の乗つとるものによく見や。」

図師様：「!」これは何や?…どんぐりか?何ぞ顔が書いてある。」

森島様：「頭や。」「チャヤ、チャやうつとる場合やあれへん、  
要は、この桂馬は、南蛮の伝説にあるケンタウロスなの  
や。」

。 。 \* 。 ( 。 ) 。 ( = ( 、 、 \* ) ) 。

道覚様：「今の一手はやり直しで依存はないな。」

図師様：「もちろん。本来なら反則負けやけどな。」

森島様：「!」めんなさい。」

図師様：「今度やつたら、反則負けだぞ。（キロコ）」

森島様：「（やつしたものか。）こで負けるのは悔しいし、図師の奴は強い。」

もつ、こは特攻しやろかいではおまへんか。命を惜しむな名を惜しめ！

角よ突撃せよ。飛車も突つ込め！進め玉。お前が一番強いのだ！」

力チリ

図師様：「（手が無くなつて勝負を諦めたか。  
もしくは、玉の逃げ道をつくるか？）」

力チリ

森島様：「銀よ。桂馬、香車どもを蹴散らせー。」

力チリ

図師様：「自爆だな。こちは駒得や。」

力チリ

森島様：「想定済みや。今こそ角よ。突撃せよ。」

力チリ

図師様：「ありがとほん。（オモロイし、全滅させよ）」

力チリ

力チリ

力チリ

数分後、森島様の持ち駒は玉だけになつとつた。

図師様：「諦めよ。もう、負けたも同然や。フフヤッヒヤッ。」

森島様：「玉。頑張れ。せめてその死を飾るがええ。突き進め！」

力チリ

図師は、有り余る持ち駒の歩を手に取つた。

図師様：「王手かつ詰めだ！ 終わりだ！」

ピシャン

森島様：「負けはお前や。打ち歩詰めちつ規則を知つておるか？  
持ち駒の歩から直接、王手で玉を討ち取ることはできん

のや。」

図師様：「しもた。や、やりなおしを。」

森島様：「一度田は無いことやつたからな。負けは負けや。  
稻穂村に来てくれるか。」

図師様：「へそつわ。約束は約束や。いつ出立だ？」

森島様：「今すぐに決まつておるわ。」

新たに仲間に加わった図師様を連れて、宿屋に帰つた一行。まだ、日は高い。

森島様：「これで6人揃つたな。あと一人はどうするか。」

つゝかー：「流石に、今度こそ、侍を雇つや。変なのを雇つうことになるのはもうじつ」

りや。」

井之川様：「おづ、わてに任せとけ。とびきつ強いのを雇つからう。」

なおよし：「頼みまんねん。このまんまでは、長老達に怒られてしまふわ。」

戸のそばで、櫂を上段に構える井之川様、一壁、一・・・。

大通りに歩いている侍に声を掛け、応じた侍を試してふるこわける算段である。

まさひやんが大通りで、田舎しい侍に声をかけている。

森島様と農民達、僧侶達はゆつたり、玄関に座っていた。

まさひやん：「…そういうことやので、話だけでも聞いてもらえまつしやろか？」

その辺の侍：「ちつ。農民に雇われてたまるかー」このがきめー」

まさひやん：「…すいまへん。」

森島様：「なやろかか来まへんなあ。まさひやんでは役不足か。

道覚様どの、ちーじばかし行つて侍を連れてきてくれんか。

猫の怨靈にたたられておるから、

高名な念佛僧が除靈してさしあげると言えば、

来てくれるよ。」

道覚様：「人をだまんねんような」とはせぬ。それに侍を試すのは、ウチは反対や。

もし、強かつたとしても、試したとあつては、氣を悪くする。

弱かつたら、井之川様の櫂にぶつたたかれて死んでしま

うわ。」

恵向様：「あむあみだぶ、南無阿弥陀仏」

つつかー：「オラは怖いよー 侍に斬られるよー

そうべい：「そう、おびえるでない。つつきー。」

それに宿屋の主人が出かけとる間だけや。

宿屋の主人は、もつすぐ帰つてくれる。」

そのとき、高速で宿屋の入り口に向かつてくる者があった。  
井之川様は、手に力を込めた。一気に緊張が走る。」

飛脚：「む。 『冗談を。』」

宿屋に向ってきた飛脚は、入り口の手前でピタリと止まつた。

井之川様：「……！」

森島様：「お見事。さあ、中へ。」

宿屋の広間で話し込む一同。

森島様：「試すようなことをして、すまなかつた。こういつわけやつたのや。」

飛脚：「侍を用心棒として雇つちつことやろか。それは大変やね。」

森島様、これが積藁の国屋書店から依頼された本や。受け取りの確認を。」

森島様：「いや、そのまえに。野伏退治の件、協力をしてくれんか。」

「

飛脚：「いえ、ウチは侍ではおまへんやし、

戦場の経験もおまへん。雇つていただいても、」

森島様：「せやけびダンさん、試験に合格したではおまへんか。た  
いした腕前や。」

飛脚：「お密様の荷物を安全に届けるのも、ウチの役田やうから。  
賊に襲われたり、Hライんや。危険を察知する」  
とができて、

一流の飛脚と言えるんや。今のじ時勢や。」

森島様：「その能力欲しい。働かんか？」

飛脚：「申し訳おまへん。飛脚の仕事があるさかいに。」

森島様：「じやあ。その本。受け取りまへん。」

飛脚：「は？」

森島様：「野伏退治を引き受けてくれへんと、注文した本受け取り  
まへん。

それで、積藁の国屋書店に届やうかかつたよーつて言い  
にいく。」

飛脚：「それは困るんや。ビツか受け取つておくんなはれ。」

森島様：「だ~め。」

飛脚：「うへ…。荷物はここに置いておあがむわがこ…」

森島様：「お主はそれでも、飛脚か…」

それを生業としとるなら、命に代えても届け  
るべきやう…！」

そのためには、危険を察知するほど、  
用心を払って仕事をしとるんやないのか？…」

飛脚：「そないな」と言われても…」

森島様：「受け取りの花押なしで、積藁の国屋書店に報告しても納  
得せんやうつな。

ウチが届やうか」と文句を言へば、わからぬ。評判  
落ちるよ。

そうじたら、仕事の依頼、来るのやうか？

飛脚：（ 、 、 一一一 ）

森島様：「ほれほれ。」

飛脚：「その仕事引き受けまんねん。後生やうから、本の受け取り  
を。」

なおよし…「森島様が鬼に見えてきた。」

つゝやー…「うむ、同感や。」

森島様：「名はなんと申す？」

飛脚：「鹿沼通泰。飛脚仲間からは、疾風のみちひろと言われとる。」

「

こうして、7人の仲間が集まり、村を守ることになった。

## 第1章 稲穂村からのお便り（後書き）

次回。侍は皆を置いて出かけてしまう。その他大勢は、どうやって敵に立ち向かえばいいのか。ああ、どうしよう。

## 第2章 陣中からのお便り（前書き）

いろいろと困っていた農民達は、侍を含めた7人を成り行きで雇うことになってしまった。僧侶2人、子供1人を含めたこの集団で、稻穂村の危機にどうやって立ち向かうのか。関西風戦記、第2章が始まります。

## 第2章 陣中からのお便り

そうべい、なおよし、つつきー、森島様、恵向様、道覚様、  
井之川様、まさちゃん、団師様、みちひろ  
ほんで、大おじじと金一じいが車座になつて  
薄暗い部屋の中で話しあつていた。

そうべいは、大おじじ、金一じいに土下座をしていた。

そうべい：「申し訳おまへんやつた。侍7人雇つトコ、侍は1人し  
か雇えず、

よくわからん者をこないなに雇つてしまおつたんや。」

金一じい：「野伏を退治した村は、侍を7人雇つたんだぞ！」

それでも何人も亡くなりよつたちゅうわ。

侍一人で、勝てるわけなかろうわ。

前例通りやらんかい！この馬鹿どもめ。」

大おじじ：「まあ、まあ。侍を7人雇つて来いと言えば、  
侍でないものも雇うことになるやもしれんと思つては  
いたのや。

それに、高名な極楽大空寺のお坊様が来てくださつた  
とは心強い。」

金一じい：「ここまで前例をばずれてしまつては…わしには判断で  
きん。

大おじじ、許可の判断は任せた」

大おじじ：「7人侍雇つた村は、何人も死者がでたそつや。  
それはある意味敗戦と言える。

そやが、僧侶を含めて、このもの達ならば、もしや…。  
他に打つ手は、なかるつわ。よし！ この者達を雇つ」とを許す。

森島様ぢの。侍は森島様だけじゃ。この村を頼む。  
この村の農民達を指揮してくれ。

森島様：「かし」まりたんや。わうこえば、自己紹介がまだやつた  
な。」

大おじじ…「わうやつた。わうやつた。すっかり忘れておったわい。

」

森島様：「まづは、ウチが。森島 倫正と申す。

生まれも育ちも積藁の国、七根村やけび、  
仔細あつて3年ほど前から古河茅の国で浪人をしとる。  
今回、たつた一人の侍となつてしまつた。

戦がわかるのはそれがしだけやので、  
皆の指揮は、ウチがさせてもらひでことになりよつた。  
皆のために全力を尽くす所存や。」

道覚様：「ウチは道覚や。見ての通り出家した虚無僧やのに戦には  
参加しまへん。

かと。

あと、托鉢でお会いしたときなどつかよひお願い  
申す。」

井之川様：「わしは櫂の使い手、井之川や。

櫂を振り回したら侍やらなんやう木つ端微塵や。ハハ  
ハハ！」

「お願いしまんねん。」  
「まあひやん：「ウチは明津真之や。一番若輩ものやけいじやん」

「！ 森島様：「まさちやん！ 君は侍か！？ 手に持つとる傘はなんだ

「。ちがひのまゝ手に持つてゐるのぢやない。」

金一じい：「？？？」

図師様：「ウチは図師昭輝や。絵師を仕事としとります。

も仕事でおへんなはれ。

手を。

みちひり・「ウチは鹿沼 通泰や。戦の経験はおまへん。  
せけど、云々時やりなんやりでお役に立てるかと存じ  
まんねん。

積藁の国のB街へも3日あれば荷物を届けます。  
ご入用のときは、ぜひこのみちひろに。」

惠向様：「南無阿弥陀部、南無阿弥陀仏。」

森島様：「頼もしい仲間が揃つたな。」

森島様：「では、初の作戦会議を始める。」

「まずは、そうべい。この村の現状と防衛につかえそな

「」と教えてくれ。」

そつべい：「村は見ての通り荒廃しておるんや。

米や雑穀も冬を越えるだけで精一杯。

野伏は、40人の小集団やけど、種子島を持つており、やろかり強敵や。

村の人間の半数は既に逃散して今は、80人ほどや。

戦えるものは40人あるかおらへんか…。

近隣の村に助けを呼べば、もうちびつとあつまるかも

しれまへん。

この村は山と川に囲まれ、上手く堀や柵をつければ、攻め難い土地だと思つで。」

つつきー：「いや、それはどうかいな。4面に分けたら、10人しかおまへんか。」この村、10人で守れるよくな広さではおまへん。」

森島様：「うむ。 そうなのや。

やから、子ども、女、老人、問わず、戦には参加してもらうで。」

なおよし：「ちーとばかし待て、子供や老人ではそないな戦力にはならんぞ。」

森島様：「よい。 戦力になるかどうかが問題ではおまへん。

では問うが、戦いの間どこに、これらの者を置いておくつもりや。」

なおよし：「それは、そつやけど… 賛成しかねる。」

森島様：「槍を持たせたほうが安全かもしれんぞ。致し方ないと諦めてくれ。」

「これで、80人だな。4方面に分けても20人や。他の村の援助か…、

いざひつときはみちひるに伝令に行つてもらわねばならぬな。」

森島様：「次に、まさちやん！ 野伏の情報はなにか持つてあるか？」

まさちやん：「は、はいー昔は、野伏の頭領、公文とやらは、人望に厚く、

豪放な人柄で知られておったんや。2年ほど前から、主家の滅亡とともに、浪人となり、当時の部下とももに野伏となつて

悪行をし始めたらしいんや。」

森島様：「そうか。それは貴重な情報や。ありがたい。」

なおよし：「まさちやん。なんでそないなことを知つとるんだ？」

まさちやん：「宿屋にはいろんな方がいらっしゃいまんねん。巷のうわさは大体耳に入るんや。」

道覚様：「（なるほど。それで手代を。）」

森島様：「そういう」とや。それでまさちやん。

古河茅の国は、なんでやねん野伏を捕らえる」とがでけへんか。わかるか？」

まさちやん：「稲穂村は、となりの国の積藁の国との国境にあり、

不用意に兵を出せば、積藁の国を刺激しまんねん。  
また、討伐隊が来ても、盗賊は積藁の国にすぐに逃げ込む。」

森島様：「もし、古河茅の国に討伐隊を頼んで、要望を汲んでくれるような人はおらんか？」

まさちやん：「さうやね。盛野様ちう氣骨のある人がいらっしゃいますわ。

盛野様は、野伏の取り締まりのための出兵を家老の田中様さまに志願したそや。

やけど、田中様さまが却下したと聞いていますわ。」

森島様：「エライぞ！ まさちやん。

よし、これだけの情報があれば、後はなんとでも。では、具体的な作戦と作業を指示する。」

森島様：「まず、この村を城にする。井之川殿は土木工事を指揮してくれ。

簡単な作業や。この地図の線に沿つて、空堀と柵を作ってくれればええ。」

地図をパサリ。

井之川様：「了解だぜ！」

森島様：「図師様。戦には旗が不可欠や。

この文字の旗を作ってくれんか。材料は、むしろでかまわん。」

紙切れをパサリ。

図師様：「了解！」

森島様：「恵向様は、川原で大声で念佛していればええよ。僧侶だし。」

恵向様：「南無阿弥陀仏。」

森島様：「ウチはまず、農民たちを訓練する。

みちひろと道覚殿はちーとの間井之川殿を助けてくれ。」

「とりあえず、この方針で進めていく。」

ほんで、物見の番は、農民と雇われたもので、交代で行うからな。

既、そのつもりで。では、作業開始だ！」

野原に森島様と竹やりを持つ農民達が整列している。訓練を行っているのだ。

森島様：「まず、やりの構えはいかず。ほんで、せひせひって、突けー。」

ビコッ

農民一同： ザつ。

森島様：「そうや。 そないな感じや。 次に、行進をいれるぞ！ 列を崩すな！」

農田一回・・ぞれ、ぞれ、ぞれ。

森島様：「うん、立派なもんや。さあ、掛け声をいくぞ！」

みだぶ、なむあみだ」  
南無阿彌陀、なむあみだふ、なむあみだふ、なむあ

農民一同：「南無阿彌陀、なむあみだ、南無阿彌陀仏、なむあみ  
だぶ、なむあみだ」

森島様：「ええぞ！ 霧岡氣でてきたやないか。（ ^ ^ ）」

なあよし…「お母さんへ。ときの話とか、勝ざきとかはやつたつせんんで?」

森島様：「つむ。不要や。戦争で一番怖いのは、

詰絞された兵で、弓を引いても、矢を放てても、矢が当たらない。矢を放つた矢が、矢先が折れてしまう。死ぬ気になりよつた兵が、一番怖いのや。

のせ。  
」

農民一同・ぞひつ、ぞひつ。「なむあみだぶ、なむあみだぶ、南無阿弥

「

図師様：「あーい。書いてあつたとおりの旗を作つたよ。」

森島様：「さすが、早いな。」「うむ。ええできだ！」

つつきー：「なんてかいてあるんや。なんか見覚えがある文字やけど。」

森島様：「南無阿弥陀仏って書いた旗だよ。

「いつの旗は厭離穢土欣求淨土ってかいてあるよ。○（

^ ^ ）○

図師様：「ほんまにこれで、ええのか？

意図はわからぬでもないが、これではまるで…一向一揆みたいな。」

森島様：「大丈夫。あくまでこれは野伏への対策やから。ヽ（。、

。）ヽ

森島様：「「」の旗一つ貰つよ。

図師殿。悪いが、訓練をちびつとの間見ていてくれへんか？」

図師様：「「」に行くつもりや。ウチでは訓練は無理や。」

森島様：「ちーとばかり、みちひろに用が。

あと、訓練は迫力を感じればええから、そないな方針で。よろしくう頼みまつせ！」

パタパタ。

森島様は、堀の工事場所ちかくでみちひろを見つけた。

森島様：「おーい。出番だぞ！みちひろー。」

みちひる：「やつとやろか。それで、どないな仕事で？」

地図をパラリ。

森島様：「この旗を身につけて、この地図の通り村々を回ってほしいのや。

できるかぎりの高速で

みぢひの…「西郷、古河衆の國中やね。」の道だと結構かかるんや。

2週間いや、もうあひとかかるかもしねへん。

森島様：「大丈夫。それで十分。旗はこれや。」

みちひり…「…」されば、南無阿弥陀仏。やうか…?」「

森島様：「そうや。これをつけて、村に入つたら、

「南無阿弥陀仏を大声で唱えよ それで ジハ 叫べ！」

のは稻穂村に来い！」

みちひろ：「なんだかよくわかりませんが、走って叫ぶだけの仕事なら、簡単そうや。

「信仰心に問い合わせれば、確かに人は集まるでっしゃる。」

L

森島様：「よろこべたのむよー。みんなの命運はお主にかかるとるん

だ！

食事はさじ二、三で振舞つてもいいと想つわ。  
やけど、一応路銀を渡しておくれよ。」

チャリン。

みちひる…「三文…？」「れだけ？」

森島様…「これだけ。」

みちひる…「鬼やね。」

森島様：「大丈夫だよ。みんな騎つてくれるから。やせしいもん。  
食料は現地調達で。」

みちひる…「ひづね。」。（、、一一一）

森島様：「ああ…走れ！飛脚。どまでも走れ！明日へ向かつて走  
れ！」

みちひる…「まだ、なあんも準備できてしまへんつてば。鬼。（  
一）」

土木工事の休憩中。

図師様、井之川様、道覚様が、話をしていた。

道覚様：「図師殿は、森島様と親しいようやけに、こいつたいあいつは何者なんだ？」

図師様：「ただの浪人ものや。3年前までは積藁の国で仕官したこといたらしい。

そのときからの付き合いや。

なんの仕事をしとったのかを質問したことがあるが、

まともな答えは返ってきたことはないな。

察するに、当時の仕事は、書庫の管理と、寺社の見張りやひりか。」

井之川様：「やあ、どう知り合ったんや。侍と絵師にそう接点はないやひりか。」

図師様：「積藁の国のある由緒あるお寺に屏風を収めたのや。

そうしたら、あやつは文句をつけてきた。」

道覚様：「どういな？」

図師様：「お前の絵には、発見が無い。ただキレイなだけや。美しいだけでええのか！？ってね。いちやもんや。」

井之川様：「確かに、森島様が言つてそつなことや。」

図師様：「やから、ウチは言つてやつたのや。」

やつたら、お前が手を加えてみよーってね

道覚様：「それで、何ぞしでかしたのか？」

図師様：「なんと、セミの抜け殻を拾ってきて、屏風に貼り付けた。

そうしてから、屏風にこう書いたんや。

「さて、この絵に蝉は何匹いるでしやろ？」

道覚様：「意味不明だな。といつよりもガキの遊びだな。」

図師様：「その翌日、森島様は積藁の国を首になりよつた。

それで、浪人として流れてきたのや。

将棋の会で、偶然再会した時は驚いたものや。」

井之川様：「3年もなんで、浪人のままなのや。仕官はしようとしどるんか？」

図師様：「いや、浪人のまんまやつたわけではおまへん。

再会した時は、古河茅の國家老の田中様の部下の一人として仕官しどつた。

その後、奇行をしたらしく、追い出され、

何年かは、本屋の用心棒をしどつたらし。」

道覚様：「また、奇行か。……本屋に用心棒が必要なのか??」

図師様：「きょうびは盗んで売りわばくやからもあるからな。

そうそう、積藁の国屋書店やつたやうか。その店は。」

井之川様：「聞けば聞くほど、変わった奴だな。かわいそうな氣もするが。」

図師様：「あれはあれで、日々楽しそうやからええではおまへんか。

奇行をしていても、それが正攻法だと言い張つとね。

まあ、意外と正しいことが多いがね。

まあ、そろそろ仕事に戻らうか。」

井之川様：「トトロで、図師殿、今そつちでは何の作業をしとるんだ？」

図師様：「ああ、ウチは、今、農民達の服を朱色に染め付けるよ。もう、日が覚めるよつた真つ赤な色や。迫力重視でね。

そのうち君達の服も赤に染めるから。」

井之川様：「全員赤か。確かにそれは怖いにちがえねえ。」

朝早く、森島様と道覚様A、図師様とそつべいが道に立つとる。

森島様：「道中の飯まで準備しどつきただきかたじけへん。」

道覚様：「もし、留守中に野伏が攻めてきたら、手はず通りに防戦を。」

そつべい：「はい。道覚様、お侍様、お氣をつけて。敵の本拠地に行ぐのやうか。」

森島様：「周辺の地形も探るから、1週間以上留守にする。留守中はくれぐれも頼む。」

図師様：「まかしといてくれよ。」

森島様：「うむ。ほんで、3つの巻物を書いておくから、非常事態になりよつたら、それを開けてくれ。指示が書いてある。非常事態になりよつたらだぞ。それ以外は役立たないと思つわ。いや、非常事態でも役立たないかもしけんから。そのときはあしからず。」

図師様：「いつたい何が書いてあるんだ？」

森島様：「それは言つては意味がないやひ？（ + \* ）」

セツベイ：「気になるな。」

森島様：「ウチの大事な戦略なのや。大切に扱うのだぞ！」

図師様：「ほならお気をつけて。」

森島様：「それや、行つて来るよ。」

ザクツ、ザクツ。

道なき道を歩く一人。

道覚様：「ほんまに」いつちなのか？

もう、人影も無いし、ここはもう積藁の国では無いのか  
？？」

森島様：「ええのや。ええのや。これで。」

道覚様：「どこに行こうとしとるのや。  
わしは不安でしゃあない。もしや戦から、逃げ出したの  
か。」

森島様：「着けばわかる。

実は、積藁の国屋書店本店に行きたいのや。  
月刊菜根譚の発売日なのや。」

道覚様：「何！ しないなときに何を申すか！ 本屋だと…ばか者  
！」

森島様：「まあ、まあ、やから、着けばわかるつて。  
落ち着いて。怖いな。ボウズやろ。」

ザクツ。ザクツ。

そないな風にして、2人は積藁の国の中の中心であるB街へ向かったの  
だった。

みちひろは走った。できるだけ早く、村々では言い含められた言葉を大声で叫んでいた。

寝る時間も最小限にして、みちひろは走った。南無阿弥陀仏の旗をたなびかせながら。

皆、南無阿弥陀仏と書かれた旗と、飛脚が叫ぶ内容に驚いた。

みちひろは、全力で走った。

そのひたむきな姿に、心を打たれ、応援する者や一緒に走るものまででてきた。

そして、走る飛脚のつわさは村々を駆け巡った。

某村村民達数人が集まって、飛脚の走りを見物している。

某村民：「キヤー。飛脚さま！頑張って。」

みちひろ：軽く手を振り、

「南無阿弥陀仏！ 稲穂村は賊の討伐を行う！ 信仰あるものは稻穂村に来い！」

イエイ！

B村僧侶：「これをお飲みおくんなはれ。粥でござこ まんねんわ。

」

みちひろ：「ありがとーつ。走りながら食べるよ！ みんなありが

「うー・」

飛脚は大きく手を振った。

飛脚は走りながら思つた。

みちひる…「（ウチは毎日毎晩壹年中、他人のものばかり配達しつた。

それに誇りを持つとつた。でも、今はどうやらうわ。走る」と、そのことが、ただ気持ちええ。」

みちひる…「（それに皆が、ウチを応援してくれる。走るウチを応援してくれる。ううつ。）」

みちひる…「（それが、ムカシからのウチの生活に無かつたものや。確実に荷物を届けるそれがみなやつた。せやけど、今、気づいてしもた。ほんまは、ただ走りたかつたのや。）

その、走る姿を賞賛して欲しかつたのや。」

みちひる…「（そもそも、森島様の話に乗つたのは、心のどこかで、今の生活をしょーもないものと感じとつたからかもしねん。

確実な配達を人一倍頑張つても、当たり前の扱いをされて、賞賛されることはなかつた。

飛脚やからしゃあないと思つとつた。

その身分を越えたことを望むべきでないと思つとつた。

みちひる…「（依頼人が望まなくとも、全力で毎日毎晩壹年中走つ

」

た。

それは、確実で早い配達のためやない。

心にわだかまりがあつたからや。

心に毎日毎晩壹年中暗い霧がかかつたからや。

あの暗い気持ちを、晴らしたかったからなんだあつ

「！…！」

みちひろの田から涙があふれる。

みちひろ：「（今、ウチは最高に気持ちええ。走ろうわ。みなをかけて。皆が応援する限り。

走ること。それだけが、今のウチのみなやつたのや。一步を踏みしめて。さあ、走ろう。）

こつして、40の村々を10日間で走り抜けた飛脚の伝説が生まれたのだった。

古河茅の国城内。大名、見目誠史郎様と、家老、田中征信様、及び家老、古郡明丞様が、

一連の騒動について、相談をしていた。

昼の日差しが差し込み、古郡様の白髪がキラキラ輝いていた。

田中様：「上奏いたした報告書の通り、

今、古河茅の国では一向一揆が起きよつとしておるんや。

一向一揆を起しそうとした首謀者達は、どうやら野伏の討伐と言い張つたが、

見目様：「なんでやねんや。

わが国の浄土新宗の總元締め、極楽大空寺の住職は、なあんもしておらんよつや。

むしろ、事態の成り行きを心配してやつたが。

田中様：「いえ、ウチの知る範囲では、極楽大空寺の恵向様と申すものが、

一味の首魁のよつや。単独で、事を起しつた可能性もあるんやが、

住職の関係は当然あるでっしゃる。

古郡様：「元ははと詮えど、田中殿、そなたが悪からつわ。稻穂村での野伏を野放しにして、

年貢もきつべとりたてとつたそつな。ほな、一揆も起きよつわ。」

田中様：「その件は面目ない。稻穂村は積藁の国との国境。簡単に兵を出せまへんやつた。

実は、部下の盛野から、何度も要請はあつたんや。

そのときに、兵を出していれば、わう悔つてなりまへん。

」

見目様：「まあ、古郡、責めるでない。ウチが田中でも同じ対応をしたやつわ。」

田中様：「盛野を差し向けて、必ずや、一揆を鎮めてみせまひよ。」

古郡様：「田中様。例の一揆を広めて歩く飛脚の件やけど、まだ捕まえることができんのか。」

田中様：「はい。飛脚は逃げ足が速い上、神出鬼没で、どないな道を通るか予想できまへん。ウチに、内通者がいるのではおまへんかと、疑つとるほどや。」

古郡様：「けつ。人ひとつ捕まえるのに何日かかっておるのや。こないな奴が筆頭家老だと。笑わせる。」

見目様：「言葉を慎め。筆頭家老にしたのはウチなのだぞ。」

古郡様：「ははつ。」

見目様：「田中様、早急に対処せよ。シッパイを繰り返すようなら、次は無いと思え。」

田中様：「かしこまりたんや。すぐに対処いたしまんねん。」

田中様は立ち上がり、退出する。  
パツ。サササツ。

古郡様：「へつ。格好ばかりがよい若造が。」

見目様：「古郡はそう言つが、田中は周囲の評判もよく、人当たりもやわらかい。」

毎日毎晩壹年中にこにこしとる好人物や。

付き合いもええし、教養もある。

「今日はシッパイしたが、仕事はできぬからうわけや。」

古郡様：「やけど、悪い話が無いわけでもなかろうわ。

能力ある者を貶めるやりかたで潰しとるちう話や、  
薄情で、笑顔で人を切るちう話も聞く。」

見目様：「それは、妬みからくる噂話ではおまへんかと思ひのや。能力あるものにはよくある」とや。」

古郡様：「果たしてそうなののかのう。」

見田様：「古郡。ちびっとはその毒舌を止めぬと、身を滅ぼすぞ。」

古郡様：「もう二の歳で、生き方はかえられまへんのや。ほりほほ。」

L

道覚様と森島様は、野伏の偵察に向かい、野伏の本拠を素通りして、積藁の国屋書店に向かっていた。

道覚様：「ほんまに良かつたのか。野伏の偵察にいかんと、こないなとこをぶらついて。」

森島様：「つむ。問題はなんも無い。月刊菜根譚の発売日にひょううど着いた。」

道覚様：「冗談かと思ったが、本氣らしいな。泣けてきた。」

森島様：「よしよし。泣いちゃだめだよ。ほら、積藁の国屋書店はあそ」だよ。」

男2人、積藁の国屋書店にいる。

ガサ、バサツ。森島様は、本を整理していた。

道覚様：「いつたい何をしとるのや。本を五十音順にならび変えたりして。」

森島様：「ちーとばかし、待つててね。すぐ、開けるから。」

道覚様：「あけるってなにを？」

森島様：「はーーこれで、完成。」

「今、ウチ達以外にだれも密はおらへんよね。」

道覚様：「おらへんが、なんでそれを聞く？」

森島様：「ふつふつふつ。驚くがええ。」

森島様は、本の棚をぐいっと押した。  
すると、本棚がぐるりと回った。

ガタッとこう大きな音と共に、暗く小さな通路が開いた。

森島様：「これどエライでしょー。ウチが作ったのや。本の重さが鍵の役目をしとるんだよー。」

道覚様：「仕組みは微妙に凄いが。うへん。見た目が、しょぼい。」

森島様：（一　一）

道覚様：「そないな顔しなはんな。で、ビリヒニ繫がつてゐるや。」

森島様：「閻魔大王がいるト。」

道覚様：「ビリヒニ繫がつとるの？」

森島様：「きょうび、道覚様突っ込んでくれへん。」（一　一）

道覚様：「で、ビリだー。」

森島様：「行けばわかる。戸を閉める必要があるから、先に行つてくれへんか。」

「どなたはんかにあつたら、森島の仲間、じやーわはは。といえばええよ。」

道覚様：「やあ、ここの暗い通路をどうあえず行けばええんだな。」

モゾ、モゾ。

道覚様は這い蹲りながら、進んだ。

道覚様：「（このよつたな通路簡単にはつくれるものでは無い。

あやしい通路や。森島つちゅう奴は何者なんだ？

積藁の国屋書店になんでこないな通路があるんだ？まあ、考へても始まりまへんか。ウチは人生を捨てた

身や。

ちびつと、森島様のボケに翻弄されてみるか。フフフ。

（ ）

道覚様A：「先に着いたのやけど、森島様せどりつこなこのや。遅すぞるー。」

「いはせじなのや。結構広にお座敷のよつやねえ。」

居合わせた侍：「わ、お主何者や。」

道覚様：（うあ。わい）…「托鉢中の道覚様や。」  
チリーン。

居合わせた侍：「であえーであえー。曲者やーーー。」

森島様：「なんでやねん、道覚、お主は捕まつたのや。」

居合わせた侍：「申し訳ない。森島様のお仲間とは露知らず。」

森島様：「ええよええよ。」の虚無僧の手違いのせいやから。」

道覚様：「つい、反射的に言つてしまつた。」

森島殿の仲間と言わねばならんことは知つておつたのやけど。」

森島様：「道覚様も結構抜けてるな。」

「ないな所に托鉢僧はいまへんやろ。ははは。」

道覚様：「くそつわ。森島めに笑われた。」

森島様：「さあ、早くいへど、道覚殿。」

積藁の国家老、伊波忠道様のトコに行くのやから、身なりを整えておけ！」

道覚様：「積藁の国の家老やとー、ちつひとせ、お主は積藁の国の人間者なのかー！」

森島様：「間者。ううん、そういう表現は悪役みたいで嫌いだな。公式の配置では、積藁の国屋書店の用心棒（休職中）で只の浪人なんや。」

絵師は勘違いしてたけれど、積藁の国で首になりよつたから

古河茅の国に行つたわけではおまへんんや。」

道覚様：「そうか。なんか見えてきたぞ。」

もせやけどダンさんて、古河茅の国を動搖させるのが、本当の目的か？

農民達に協力したのもそのためか…」

森島様：「一部分あたりやけど、それはちやうわ。

ウチは、古河茅の国の安定をも求めとるのや。

ウチは、世界はより安定した形になるべきだと思つたのや。

天下統一がなされ、戦がなく、国境も無い世界をウチは求めとる。

動搖させたのは事実やけど、それは目的では無い。」

道覚様：「農民達をだましたのか！」

森島様：「ウチがいつ、古河茅の国の人だと言った？

自己紹介の際も、積藁の国の人とはつきつけたではおまへんか。

それに、農民達には悪くようにはせん。ウチを信じてくれ。

ウチは嘘はそないつかへん人間や。」

道覚様：「むう。狐に化かされとる気分やけど、

ここまで来よつたら腹をくくるしないか。むむむ。」

森島様：「なむあみだぶ なむあみだぶ なむあみだぶ」（\*^ー  
^）ノ

歌いながら、テクテクと森島様は歩いていく。

道覚様：「（稻穂村の農民達、船頭や手代、絵師に飛脚に念佛僧、  
全員だまされておるぞ、ああ、心配や。

思い返せば、一揆風の旗や訓練、妙やつた。単に野伏

対策とは思えん。

「ハワイー」とになつていなければよいのやがど、（ハーバード）

～「ハーバードの説明～

森島様と道覚様は、野伏の偵察に向かい、野伏の本拠を通り過ぎ、積藁の国屋書店に向かつた。

積藁の国屋書店には地下通路があり、それは稻藁の国の家老、伊波忠道の屋敷へと繋がつていた。

森島様と道覚様は、伊波忠道様と面会を果たしたのだつた。

「なんでやねん。さつき読んだわ！」

森島様：「お久しゅ「ひ」ぞいまんねんわ。伊波忠道様。」

伊波様：「ホンマに、」と古勞やつた。

「これだけ古河茅の国が乱れれば、古河茅の国はもはや積藁の国のもの。

凄まじき働きやつたな。

それに、毎日毎晩壹年中古河茅の国の内情をあれほど詳細に伝えてくれて、

今回の戦は勝つたも同然や、ほんまに役立つたぞ。」

森島様：「ありがたきお言葉、恐縮至極に存じまんねん。（ 、  
、 ）ゞ閻魔大王様。」

伊波様：「そう照れるでない。

まだ、もうひと働きしてもらわねばならんからな。トド  
で、

于此のボウズは、何や。」

道覚様：「拙者は、旅の虚無僧で、道覚と申す。只の虚無僧や。」

森島様：「古河茅の国内での我らの味方になる勢力の一人や。  
前回の報告書に書いてある通りや。閻魔大王様」

伊波様：「あ～あの道覚か。トライ騒動に巻き込んでしもたなあ。  
して、森島様よ。この虚無僧をここまで連れてきた訳は  
？」

森島様：「いえ、意味はおまへん。せやけど、稻穂村への帰り道で、  
やつておかねばならぬ仕事がありまして、

そのために、必要不可欠やのどじき、まんねんわ。閻  
魔大王さま」

道覚様：「……」

伊波様：「まあ、よし。お前のやることは毎日毎晩耄年年中よくわ  
らんが、

ケツには最良の結果になる。自由にするがよい。」

森島様：「はい！（ 、 、 、 ） 閻魔大王様！」

伊波様がふすまをガラガラと開ける！

伊波様：「皆の者に伝えよ！出陣や」

森島様：「はい！閻魔大王様」

伊波様：「森島よ。なんぼ褒めたからとて、照れすぎや。  
閻魔大王やらなんやらと何回も呼ぶでない。  
そないなに嬉しかったのかのハ？」

森島様：「う、嬉しくなんやろかいもん！（・・。）ゞ」

道覚様：「（…森島様の、ひげ面でかつ照れたあの顔。

この世のものとは思えん。見なかつたことにしそうわ。  
わわわ… そないな顔でこっちを見るな！鳥肌が立つ  
てきた。）」

がしゃ、がしゃ、やひ、やひ。

積藁の国の部隊、約1万が出発した。その行進の中に、道覚様と森島様の姿があつた。

森島様：「しもた～。月刊菜根譚を買ひの忘れた！！」

道覚様：「何を言つてゐんだ！この戦が終わるまで、それどこひで  
はなかろつて！ばか者。

それに、古河菴の国の積藁の国隆書店でも買えるやう。」

森島様：「わかつてへんな。月刊菜根譚は、ウチ達の伝令道具なのや。

戸刊菜根譚への懸賞応募の手紙に、暗黙で報生を書いて送るこや。

伝令が読みとれるのや。

けへん。

「車にてたら今月号を購入してしまひそれにはさういふ事はない。

道覚様：「あの月刊菜根譚にそないな秘密が…。やから、懸賞があ  
たりまへんのか。」

森島様：「懸賞？ウチは毎回当たるよ。一応、公平な抽選がなされるとかねや。

道覚殿は、運に見放されてるな、ははは。」

道覚様：「なんて」とや。またも森島様に笑われるとは。くつ（へ

— ८० (८)

森島様：「あつ。あそこへ、なんか良さげな本屋が。

月刊菜根譚あるかもしだへん。ちーとばかり買いに行つ

( ^ O ^ ) /

道覚様：「ちよつと！ 隊列を乱しては、罰を受けかねんぞ。  
く… 待て！ 一人は嫌や。わしも行くー！」

様々な方向に交錯する思い。それに伴う事態の急変。  
だが、まだ古河茅の国の稻穂村は、まだその頃は平和だった。

またひやんと井之川様、農民達が、柵をつくり、堀を掘っていた。

またひやん：「ウチの柵も完成したんや。」

井之川様：「よつっしゃあ。

あとは、堀をどれだけ深くできるかだな。一旦休憩に  
するか（^ - ^）」

またひやん：「井之川様はんは、凄腕の剣士なんやね。  
ど、どじつしたら強くなれるんやろか？」

井之川様：「剣士？ まあ、使うのは櫂やけどな。

なんだ、小僧、お前は強くなりたいのか？」

またひやん：「はい。井之川様はんもそつべいはんやなおよしぃはん

も、

皆力持ちで、大きな石を軽々と運びまんねん。  
それに、これから戦をするんじゅう？強くない  
と殺されちゃうわ。」

井之川様：「そうか。確かに不安じうつな。わても、お前くらいの  
時は、不安やつた。

ある奴に剣の極意を教えられるまでは」

まさひやん：「極意。？」

井之川様：「いや、極意ちうほどのものでもないやろか。へへ。」

「昔、わての船に客として乗った奴がいたんや。」

そいつは、わての櫂になんでやろか、

わいもよーしらんが興味を示したちうわけや。

訊くと、なんでも、近いうちに決闘をするじう。

その戦いで櫂を使いたいと。」

まさひやん：「決闘に櫂：？？」

井之川様：「そうさ、笑えるやう。刀で切られておしまいだと思  
うやん。」

やから、わても可笑しくて笑つちましたぜ。

櫂で剣士を倒すなんて発想、考えたこともなかつた。  
妙にその発想が気に入つたから、その櫂をそいつにく  
れてやつたんや。」

まさひやん：「それで、決闘に勝つたんやろか？」

井之川様：「ああ。やろかり手」わい敵やつたらしげが。無傷で戻

つてきたよ。

そいつ、ええ顔してたなあ。」

「それで、わては気がついたんや。刀でなくとも、  
例え、権のようなありきたりのものでも、  
使い方次第で、権の範疇を超えて、刀よりも強くなれる  
つてな。」

負けた剣士の方は、刀を超えた発想ができなかつた。  
やからそれまでやつたつてね。」

まさねちゃん：「それで、権を使つ劍術を。」

井之川様：「別に権で無くたつてええんだぜ、  
宿屋の手代には手代なりの「劍術」があつてもええと思  
うぜ。」

よく、森島様が「お前は侍だ!手に持つとるものはなん  
だ!」

つてお前に訊くやうつ?

あれば、わてが思うに、刀が無くても、箒でも、箸でも、  
持つてゐるものを使えば、侍のよつに戦える、  
もつともつともつともつともつともつともつとも  
つと

自信を持て!つて言つたいんやうつ?」

まさねちゃん：「森島様様があつしゃるにそひまで意味があると  
は思えまへんが…

手代なりの劍術やるか…。ウチにできぬでつしゃろ  
か?」

井之川様：「できるや。小僧が、手代でありながら、手代の範疇を  
超えられればの話やけどな。」

井之川様：「さあー仕事すつぞー！」

まちひやん：「はーー！」

積藁の国で、大規模な軍が出発したその頃、古河茅の国も、稻穂村の一一向一揆に対し、鎮圧の兵を出した。一揆の噂が広まつてから、一週間で兵を派遣した田中様の迅速さは、賞賛に値する。その部隊の隊長が、盛野厳造。盛野厳造は、氣骨のある武将として有名で、歴戦の勇士である。

盛野様：「おい！ 稲穂村へ向かつた使者はまだ帰らんのかー！」

伝令：「 稲穂村からの使者が帰還なされました！」

その時、使者として稻穂村へ行つてていた蒲原亀生が苦い顔をして歩いて来るのが見えた。

蒲原亀生。通称かもりん。かめりんと呼ぶと激怒するが、穏やかな知識豊かな武将である。

かもりん：「申し訳おまへん。交渉はシッパイやつた。」

盛野様：「そないなに一揆勢の意思は固いのか？一揆方は、どないな様子なのや。」

かもりん：「奴らは、まだ、この期におよんでも、野伏退治と言ひ張つていまんねん。」

やけど、南無阿弥陀仏の旗をかかげ、赤い装束に身を包んだ姿、

あれはもはや、野伏退治の様相ではござりまへん。

南無阿弥陀仏を唱え、竹やりを構えて、猛然と突き進む訓練する様子も、

鬼気迫るものがあつたんや。決死の形相とはあのことや。しかも、一揆勢には女や子ども、老人まで含まれとるよ

うや。

奴ら、全滅もいといまへんちう」とひりしじやる。

盛野様：「むむむ。それはまずいぞ。奴らは死ぬ氣か。

それに、女、子ども、老人に僧侶。

わしらが、戦で勝つたとて、無傷ではいられんぞ。殿とわしの声望は地に墮ちるやうつて。」

使者A：「一揆勢の首謀者とみられる恵向様と接触したのやが、ひたすら念仏を唱えるばかりで会話になりまへん。問い合わせやけども、「一揆では無い」と言い放ち、すぐに念仏をはじめたんや。

これは交渉の余地無しちう」とひりしじやる。」

盛野様：「（そこまで思い詰めておつたのか。わしが独断でも野伏を退治しておれば。

これは、わしのせいなのや。対応を誤らなければ、こ

ないな」とには。

すまぬ。稻穂村の農民達、田中様。この戦。ウチが悪魔と呼ばれよつとも、どれだけ泥にまみれよつとも、

古河茅の国中に火が広まる前に、この盛野様がみなを賭けて、

収めなければなるまいて。」

盛野様：「使者Aよ。もつ交渉はよい。もつ進むしゃひかとむづか。」  
(…修羅の道へ)」

使者A：「はい。申し訳ござまへん。」

盛野様：「苦労をかけたな。」

こうして、盛野様は、重い心をひきずりながら、稻穂村へ進軍したのだった。

盛野厳造様が兵を率いて稻穂村に向かつたその頃、稻穂村では会議が開かれていた。

そつべい：「どうしたものか。どうやらわしらは一向一揆と間違われてしまつや。」

なおよし：「南無阿弥陀仏の旗なんてつくるからだー指示した当の本人はおらへんしー」

井之川様：「慎重に使者をあつかわなかつたわてたちも悪いんや。あの使者め、わいたら話を聞こつせんし、あるつをし。」

まわせやん：「咄せんせなにな」と言つてもせじまつまくんし、何ぞ対策を考えまひよ。」

つつわー：「今度こそ終わりだ。侍達に斬り殺されるだ。」

恵向様：「南無阿弥陀仏、なむあみだぶ、」

そつべい：「そつこえば、森島様から3巻の巻物を貰つとつたんやつたよね。図師様。」

図師様：「ああ、3つの巻物、ちやんと持つてきたんやよ。開いてみまつしやろか。今は危機やろからね。」

あるある。巻物を広げる図師様。

~~~~~ 森島倫正の超凄い大作戦～第一巻~~~~~

みんな～元氣？ 道覚はなんとかきつさり～元氣や。

ウチの予想では、みんな一向一揆を起した首謀者になつてゐるはず

だよ。

やつたね！ 恵向様もビーライね。一揆を起しちゃうなんや。（

-
^
-
)

みちひろ殿が古河茅の国中に、一揆の仲間を集めるために触れつておるから、

事態の早期收拾を、田中様たちは考えるはずだよね。

この巻物を見るつてことは、危機やろか？

（）

盛野様が兵を率いて進軍しきてるんでしょ、

四

でも、大丈夫。積藁の国から援軍がすぐにくるから。何日かもちこたえればええんだよ。

一巻目はこれだけだよ。もし、大当たりやつたら次の巻も見てね。
必ずだよ。

静まりかえる室内。

そういうい：「森島様の予想の範囲内ちうことか。」

井之川様：「わしらは上手く転がされておつたようだな。」

図師様：「なんかむかつく文面や。まあ、次にいくか。」

森島倫正の超凄い大作戦 第一巻

図師殿は、ああ見えて生真面目やから、絶対一巻、二巻、三巻となるんでいたら、順番を守つてあけるんだよね。融通きやうかい奴だな～やから将棋で負けるんだよ。

「めんなさい。やつすぎたんや。ねやんと書いたさかい次の巻を読んでおくんなはれ。

。シニベニカラ。さひへ さひへ さひへ

図師様は、無言で巻物第一巻を破り捨てた。
そして、三巻目を開いた。

森島倫正の超凄い大作戦 第三巻

これが、ほんまの作戦ね。奇抜な作戦だけれど、必ず実行してね。

まず、今回討伐隊として来る盛野厳造。この武将は一本氣で、ええやつなんや。ちーとばかし、頑固で思い込みが激しく、融通がきかないところね。

盛野様は、女、子ども、老人までいる一揆勢と、戦いたくないと心から思つとると思つんや。

でも、命令だし、今回の一揆の責任も感じて、全力で向かってくる。トコで話は変わるけれど、図師殿は、将棋はちゃんと持ってきておるやうか？？

実は盛野様、将棋が大好きなんや。でも下手の横好きで、超弱いよ。ウチも実は戦つたことがあるけれど、守つてただけで勝てちやうの。ほんでや。上手く交渉して、図師殿は、盛野様に将棋での決闘を申し込んでおくんなはれ。

盛野様は負けず嫌いやから、挑発すると何回でも乗つてくれるよ。

どHライ作戦でしょ。あれ、信じてへん人もおるやうか？
でも、将棋で人を殺さんと済む可能性があるなら、盛野様も乗つてくれるよ。

ほんで、判断、引き際を誤る。

図師様。意図はわかつたよね。やあ、頑張つて。

できる限り長く時間を潰してね。積藁の国の軍が到着するまでやから。

あと、打ち歩詰めなんかしちゃダメだよ～

~~~~~

図師様：「話は理解した。でもなんか気に食いまへんなあ。」

つゝもー…「負けるなよーー！」

図師様：「わかってるよ。問題はどいつも渉するか。だな。」

盛野様は、稻穂村に部隊を率いて進軍している。

森島様からの密策を胸に、図師様はこれに立ち向かう。  
稻穂村の運命はいかに！

盛野様：「あれが、稻穂村や！－」

皆の者、心してかかれ！あの村は只の村ではおまへん。  
あの村は、城ぞ！城の中にいるものは、  
僧侶、老人であつても、兵隊ぞ！臆するなよ。－」

兵士一同：「はい－。」

盛野様が馬を進めたその時！その目に妙なものが映つた。  
それは、橋の上に、ドカンと置いてあつた。

盛野様：「あ、あれは何や。妙に心をくすぐる、あの形は－。」

そこには、ビヒライでかい、人の背丈ほどの大好きな将棋の駒（金将）  
があつた。

盛野様：「な、なんでやねん金なのや。せうつよつも、なんでやね  
んこないなト」「こ。」

その時、図師様が、将棋の影から、ひょいと顔を出した！

盛野様：「何者だ！－」

図師様：「ウチは、あんはんがたが一揆扱いしとる  
稻穂村を助けるために雇われた者や。（ = ）  
ご心配には及びまへん。危害を加えるつもつはおまへん  
から。」

ウチは、あんはん様に、提案にきたんや。  
盛野様にとつてもよこ賭けだと想つのやけどなあ。」

盛野様：「すでに使者との交渉を蹴りておるではおまへんか。いま  
わい文治やうなんやう……」

図師様：「交渉ではおまへん。

ウチが提案するのは、この村の存亡を賭けた勝負の提案  
わ。」

盛野様：「オモロイ。話へりこは聽こいやうわ。」

図師様：「ありがとう」わこまんねんわ。提案するのは、将棋の勝  
負や。」

もし、盛野様が勝つたら、稻穂村は無抵抗で降伏しま  
ひよ。

もし、ウチが勝つた場合は、もうこつべん将棋の勝負を  
繰り返しまんねん。」

盛野様：「ひーとほかし待て。もうこつべん勝負を繰り返すとは?  
ビツコウ」と。わこまんねん。」

図師様：「盛野様が勝つまで、この勝負を続けるひー」と。わ

盛野様：「ほなら、ウチに有利な勝負ではおまへんか。」

図師様：「いえ、それでもおまへんよ。ウチの呼びかけで、  
続々とよひかの村々から協力者がやってきていまんねん  
わ。

時間をかけずかると、ワシ等は大軍になるよ。」

盛野様：「時間を賭ける、ちゅうつ」とか……。むむ。」

図師様：「はー。やつこつ」とや。勝負乗つてくれまつしゃるか？」

盛野様：「（…）の者の意図もわかる。

今の一揆勢では、まともに勝負しても、我が軍に勝てへん。

勝てへん勝負なら、無傷で負けた方がええけつとか。ワイが思うには、詐術では無い。

勝ち負けだけならば、この勝負乗るべきでない。我が軍なら、必ず一揆を打ち破る。やけど、わしが望むのはそないなことでは無いのや。できれば、双方無傷でこの戦を終わらせたい。こやつの提案のせいで、変な欲がてきたわい。しかも、何よりも、無辜の者を殺さんと済む。これは、ありがたいことや。…）

盛野様：「よし、その勝負乗つた…！」

図師様：「お話のわかる方で助かつたわ～。わあ、コツチ～、特設の勝負の舞台をこ用意しておるんや。」

盛野様：「どこに連れて行くのだー異ではあるまーなー！」

図師様：「野原に線を引き、この大駒を動かして勝負するのや。農民も、兵士も大興奮の勝負ができるんねん。ええと思いまへんか？」

盛野様：「ははは。それは楽しそうや。

（…兵士と農民の戦う気を削ぐ気か。みなは時間がせぎのため、やるいつな。

もし、わしが勝つて稻穂村が降伏しても、後腐れ無いやろ

うわ。

正々堂々の勝負やからな。こないなお祭りを考えるとほ  
いやつ、すさまじき策士だな。…」

図師様は、人の背丈より大きな巨大将棋による将棋対決を盛野様に  
申し込んだ。

盛野様はそれを受け入れ、2人は史上稀に見る大決戦をくり広げる  
こととなる。

図師様：「2—角成り！！」

農民一同：「2—角成りだぞ～」 「お～い。」 「ええか～」  
「そこだそこや。ひっくり返せよ～」

盛野様：「3—飛車！！ 三間飛車で一気に攻めるぜー。」

兵士一同：「飛車だ～。飛車を動かせ～」

「よいしょ、よいしょ。これでええか～」 「ええぞ

」

もう既に、盛野様は3回負けていた。図師の将棋は、非情はほど強  
かつた。

そして、また、盛野様の玉は追い詰められていた。

盛野様：「ちくしょうわ。強い。強すぎる。

（…こないなことなら、将棋なんてやめてここで捕らえ

るか?……」

図師様：「5五金。詰みや。」

盛野様：「ま、参った。」

図師様：「ファファファッハ。 井之川殿、あれを持ってきてくれへんか。」

井之川様：「わかつたぜ。なおよし、ちーとばかし手伝え。」

井之川様、なおよし：「よいしょ。よこしょ。せーの。」

パシャン。

井之川様となおよしは、図師様の玉の上に、玉冠のよつな形をした竹かごを置いた。

盛野様：「何のまねだ?」

井之川様となおよしは、またなにかを運んでくる。

今度は、さらにおおきな竹かご。目が異様にあらい。

それを盛野様の玉の上に置いた。

盛野様：「いったいどうこいつもりだ!—!」

図師様：「王者に王冠を載せ、敗者をかごの中に閉じ込めたひつじケや。」

負けた奴は、こうしてくれるわ! フアファファッハハ。

L

盛野様：「くそ」。ウチを愚弄するとは

「のうな辱めを受けて、負けたまんま終われん。もつこつぺん勝負しろ……」やつめ～…」。(、

1

國師様： 望む所が、何度でも戦いまひよ。

そして、盛野様が十五回目の負けを嘆した時だつたらうか。  
もう、日が暮れかけた、夕焼けの空に、盛野様を応援する声が響き  
始めた。

兵士達：「盛野様負けるな！！頑張れ！」

それはどこからともなく広がり、一つの歌になつた。

兵士達：「おお～おお われらが希望、盛野様、何回負けても、勝負をすてるな

様、我らが盛野様」

盛野様：「お、お前達は……。」（ノ）（ノ）

農民達もその応援に対抗して、応援をはじめた。

農民一同：「われらが稻穂村の戦略家図師様、図師様、図師様だ！」

将棋をさせれば天下一、金でも銀でも蹴散らすぞ！

図師様～図師様～おおお、おう、おう、おう～

図師様：「恥ずかしいから、やめておくんなはれよ～。」

そして、稲穂村の春のタベは、暮れていった。

その頃森島様と道覚様は、歩いていた。

森島様：「やあ、問題や。今、ウチ達2人はどーに向かつとんでもしゃう。」

道覚様：「稲穂村ではおまへんのか？」

森島様：「はずれ～。答えは野伏の本拠や！」

道覚様：「なんだやねん、いまさら、野伏を気にする必要がある。この一大事に。」

森島様：「ええの。稲穂村はもう解決したも同然やから、

積藁の国が古河茅の国を滅ぼして終わり。それでおしま

い。

野伏の問題は今動くことが一番大事。」

道覚様：「…どうこういや。」

森島様：「野伏達に、積藁の国への帰参を呼びかける。

仕官の要請やね。積藁の国の周りにはじ国をはじめとして、

積藁の国と敵対する国が多いから、積藁の国は戦力になるものを欲しじるんだよ。」

道覚様：「積藁の国としては、犯罪者を雇うことで、民意の反感を買うのは怖いが、戦力としては欲しい。古河茅の国への侵攻への協力をしたことにより、積藁の国に取り立てたことにしたい。

戦争中の「ちや」の中で取り立てれば、民意を逆なでせん。そういうことか？」

森島様：「う」名答

「ほら、あそこの集落、あれが、野伏達の本拠や。」

テクテクテク

道覚様：「おい！待て森島様。

そないな堂々といふつもりか？偵察ではおまへんのか？」

森島様：「もへうわ。これからすることは交渉だよ。しかも、野伏達にお得な。」

道覚様：「確かにそうやけど、……」

森島様：「道覚様！そないな意氣地なしなら置いてくぞ……。」

道覚様：「はあ。行くしやろかいのか。ああ。」

森島様と道覚様は、野伏の本拠地に直接乗り込んだ。

森島様と道覚様は見張りの野伏に話をつけ、野伏頭領と面会を果たした。

野伏の頭領公文隆寛は、好々爺として、野伏の頭領とは思えないほどの好人物だった。

森島様：「うーん面会しどうただけるとは、ありがとうございます。まんねんわ。」

公文様：「よーい、よーこ。」この口の中や。

夜道も危ないやううつ。ゆっくりしていけばええ。  
さて、まづお主らは何者や。  
何の用でここに来よつた。」

森島様：「ウチ達は、積藁の国の家老伊波様からの使いで、森島と道覚と申す。

公文殿によいお話を持つてきた。」

道覚様：「…」

公文様：「よいお話か。それは結構。

…侍に虚無僧か。妙な組み合せだな。もしや、その方  
ら忍か？」

森島様：「『』想像におまかせしまんねんよ。そないな」と云つ、早速、交渉しまへんか。」

公文様：「やうやな。それでよこ話とはなんやうかや。」

森島様：「ちよつとい今、積藁の国が古河茅の国に攻め込もうとしておるんや。」

そのための、調査の過程で、野伏となつたる公文殿のお話を耳にしたんや。」

積藁の国のお老、伊波様はそれを知り、

公文様を登用するように、ウチに命じたんや。

伊波様は、野伏全員を積藁の国に雇つことを約束するとおつしゃつておるんや。」

公文様：「もし、断るといひなるのやへ。」

森島様：「伊波様は、断るなら切り捨てよとい命令されていましたわ～。」

頭領公文隆寛の後ろに控えている野伏たちがざわめき、立ち上がつた。

公文様：「話は済んでおらん。控えろー。」

「すまなかつたな。それで、続きを。」

森島様：「もし、ウチがあんはんを打ち擲じても、積藁の国のお軍が討伐しまんねん。」

国境ちうづ地の利をなくしたこの集団を捕らえるのは易しい。

「

道覚様：「…」

野伏頭領：「答えは拒絶だよ。ヒゲを生やしたお侍様。」

森島様：「なんでやねんやろか。理由をお聞かせねがいたい。  
これほどの好条件を断る理由を。」

野伏頭領：「わしは、探してあるのや。昔の主君を。殿や若様を。  
二年前、やつたなあ。」

仕えとつた家は、古河茅の国でも有数の豪族で、見田  
様の下で甘んじてはおつたが、  
若様もお強く、天下を狙える家だと、毎日毎晩壹年中  
誇りに思つとつた。

せやけビダンわん、世の中は厳しく、田中様の奴に些  
細なことで因縁をつけられ、  
あつちづ間に、滅ぼされてしまつた。殿や若様は行方  
しれず。」

道覚様：「…」

森島様：「それで、野伏を。わかりまへんね。」

ウチならどなたはんかに仕えて、そつしながら主君を探  
しまんねん。

それに、はつきり言えば、野伏頭領様には、求心力があ  
るが、組織力は無い。

資金、それどこのか日々の食糧にさえ困り、

部下達は盜賊をし、品位をなくした部下の中には

人さらこまやる輩がいる。はつきり言えば、あんはんは

もはやこの世界の害悪や。」

道覚様：「…」

公文様：「その通りや。ほんこその通りや。」の2年間。幾つの罪を部下に犯させたのか。

わしは、一君には仕えん。… そりやな。わしを斬つてくれ！」

もう、歳や。主君も見つかぬ。

部下達よ。本田の時までついてきてくれてあつがどうわ。

手出しほするなよー斬れ！その刀で斬れ！

森島様：「もとからそのつもり、この世の害悪は消え去るがええ！」

抜刀する森島倫正、泣き崩れたり立ち上がる野伏達。

道覚様：「ま、待つてくれ。このような老人を斬るのは止めてくれー！」

傍観していた虚無僧道覚が、急に立ち上がり叫んだ。

森島様：「は。聞こえへんなあ。」

…

道覚様：「わしが、その老人が言つ若様だーやから、やから、止めてくれー！」

森島は、ニンマコヒベツトヒとした笑顔になつた。

森島様：「やつと言つたか。調査済みだぜーついでに、その深編笠をええ加減はずせー！」

ズバツ、サツ、ヒュツ

森島様は虚無僧道覚の深編笠を、切り裂いた。

公文様：「若、若様ではおまへんか。」ついでにできる口がくるとは…（ノーノ）

道覚様：「（ノーノ）済まなかつた。わしが不甲斐ないばかりに。父は、館が落ちたあの晩、矢を受けて死んだんや。

野伏の話を聞いたとき、もしやと思つたのや。やけど、会わせる顔が無かつたのや。わしは、あの戦ではなんもできなかつた。

日頃誇つとつた槍術も、軍学も、なんもできなかつた。や。それ以来、人と日をあわせる事ができなくなり、ずっと虚無僧として深い笠を被つて暮らしどしたんや。

野伏頭領：「若様、完璧を求める悪い癖は治つていまへんな。

あの戦、相手は一枚も三枚も上手やつた。戦の前から、勝負はつとつたちうワケや。やう、オノレを卑下なされるな。

みんな、限られた中から、最良の選択しかできん。若様は今でも、十分立派や。」

道覚様：「…すまぬ、…すまぬ、爺。」

森島様：「「ホン。 さて、積もる話もあるやうつが、本題に戻らせていただこう。」

森島様：「野伏頭領様。」これからどうなぞこます？」

野伏頭領：「もちろん。若様の家来に戻るんや。」  
森島様：「道覚殿。お主はどひする。もつ、虚無僧のままではござれんぞ。」

道覚様：「うむ。公文達を従えて、積藁の国の伊波様に仕えよう。ほんで、還俗する。

わしは、これから、元の名前、出間新之助と名乗る。

森島様、道覚やらなんやらとわしをよぶでないぞ。」

森島様：「よしー交渉成立だねー！ これから、稻穂村の救援に行くぞー！ 今頃、激戦やううなー！」

出間新之助：「（… 今回は森島にて感謝せねばならんな。

虚無僧をしつたのは単に口から逃げとつただけだ、

まだ、やることがわしには沢山ありますや。まだ、世を捨てるには早すぎる。

公文達もいるし、武功を挙げねば。

名を成さねば、死んだ父も浮かばれへんやううわ。

森島、お前とちーとの間一緒にいくぞ、お前についていけば向ぞ起きそつだ…」

森島様：「ルン、ルルー　○（〃^ ^〃）○

…（「いまでは大成功・・ひひひ。成功か。みなが順調や。せやけえ、」）うこうときこそ、気をつけなければいけへん。）

（みちひろは上手く、扇動したやううか。図師殿は将棋対決に上手く持ち込めとるやううか。）

（いや、失敗の要素は少ない。だが、考えん。思いがけへん落とし穴があるはずや。）…」

みちひろの疾走は、終盤に差し掛かっていた。

走行予定にあつた48の村の内、40の村は既に通過していた。走り始めて11日目。これほどの長距離を、疾走したことは、みちひろも経験したことはなかつた。

体は疲れとるはずだけど、みちひろは疲れをみせず走り続けとつた。春の夜道、輝けなかつたオノレを、燃やしつくすようにみちひろは走つた。

みちひろ…「…（あと、8の村をまわれば終わりか。

走り始めたときは長く感じたが、今では短く感じるな。）…」

みちひろ…「…（この旅で、オノレは何ぞ変われた氣がする。

心を覆つとつた霧が晴れたようだ。そないな感じ

だ) …

みちひろ…「…（森島様や井之川殿、農民達は上手くやつとのやうか？

れいと上手くやつとる。れい信じたい。）…」

みちひろ…「あ、もうともうと速く、一気に走りきるか…」

みちひろは、一段と速度を上げ、南無阿弥陀仏の旗をたなびかせて走った。

ほんで、暗い森に差し掛かった。その時、雨が降り始めた。

みちひろ…「…（む。嫌な感じがする。賊か。いや、この空模様のせいか。）…」

森島様の考えた走行ルートは、追手の裏をかくものであり、みちひろはいつも難を避けることができていた。

運悪く、走行ルートに追手が潜んでいても、持ち前の直感力で、本田この時まで危機を避けってきた。だが、この時、疲れと雨で、みちひろの判断力は鈍っていたのかもしれない。

みちひろ…「…（なんだ？ 殺氣を感じる。）…（嫌な森や。全速力で抜けるぞ…）…」

みちひろは全速力で駆け出した。だが、もう既に勝負はついていた。

ヒュン。ヒュン

突然、矢がみちひろの足を射抜いた。

みちひろ・「ヴウォー」

みちひろは、顔を歪め、叫び声をあげながら、まだ走った。まだ、諦めていなかつた。走ることを。生きることを。

そのみちひろの田の前に、突然、藪の中から数人の『兵』が立ちはだかつた。

ほんで、射抜いた。

プス。プスプス。

満身創痍。血みどりのみちひろ。田から流れるものは、血やろりつか。涙やろりつか。

それでも、みちひろは歩みを進めた。一步一歩、まだ生きとる」とを主張するかのよう。

走ることが生きることと証明するかのよう。

朦朧としながらも歩みを進めるみちひろの前に、ぼんやりと侍の姿が浮かんだ。

それは、みちひろの田には、一瞬、森島様の姿のようにも見えた。

その侍は、刀を振り上げ、そして一気に振り下ろした。

みちひろの存在証明は、もう誰も見ることができない。

誰にも知られることなく、無残にも、その証明は中断されてしまつた。

走った道と、10日で40の村を駆け抜けた飛脚の伝説、ただ、それのみが残つた。

みちひろが、何者かに殺されてしまつたその頃、

稻穂村では大将棋による大決戦が続いていた。

稻穂村を代表して駒を動かす「盤上の戦略家」団師昭輝と、一揆鎮圧隊の隊長である「不屈の闘志」盛野巖造。

この時点では、団師の60連勝で、団師の圧倒的優勢やつた。だが、勝負の行方はわからない。

盛野の陣営では、明日の将棋対決に向けての作戦会議が開かれていた。

かもりん：「盛野様。失礼を承知で申しまっけど、ウチと交代しておくんなはれ！」

盛野様：「ならん。これはわしと団師の奴の決闘や。」

かもりん：「こたびの戦で、皆、将棋の駒の動かし方、作戦、みな覚えたんや。

お願ええたしまんねん。」

盛野様：「ならん。」

かもりん：「では、せめてウチが陣中で合図を送るをかいに、その通りに……」

盛野様：「そないな卑怯なまねができるか……」

その辺の兵士：「では、拙者と、是非交代を。拙者の方が、上手く指せまんねん。」

盛野様：「ならんーならんーならんー。」

かもりん：「……（頑固やな。本来の目的を忘れていらっしゃる。）」

このまんまでは図師様の思つっぽや。

兵士達も大将棋に飲まれとる。じつにかせねば……」

「

かもりん：「では、いつこたしまへんか。『早指し』の対決を提案するのや。」

そもそも、長考ありの今の状態は、図師様にとって有利で、盛野様には不利や。

沢山勝負すれば、一回くじこまぐれでも勝てるでっしゃる。

それに、なにより「公平」な勝負になるんやー。」

盛野様：「確かに、そりやな。長考ありでは、長期戦に持ち込みたい図師の方が有利や。」

それに、わしはいつでも早指しやから、その方がええかもしけへんな。」

ハツハツハ。明日が楽しみや。」

かもりんの秘策を胸に勝負に臨む盛野様、勝利を勝ち取ることまであるのか。

早朝、日の出とともに、両軍勢は、9×9の升田が描かれた野原に集まつた。

図師様：「本田もよひじこやひやひか。」

盛野様：「いや。今日は図師殿に提案したことがある。」

図師様：「ほ～うわ。何でひしゃるか。」

盛野様：「昨晩気がついたのやけど、この勝負は長考できる規則やつたな。

やけど、よく考えてみると、これは「時間」を賭けておるお主の方が有利な規則ではおまへんか！  
ほんでや。早指しを提案したい。そういうこと、この勝負、

負、

公平でに欠けるではおまへんか。」

図師様：「…（ええと）この気がつきたんやね。  
まあ、長考がいつまでかえこんだことやらなさんやら無いんやけどね。」

その辺の兵士：「やうだーーー」の勝負、イカサマだー、

図師様：「…（この空気。まずいな。）…」

「わかりたんや。早指しやね。ええでっしゃい。それで、制限時間は？」

盛野様：「一手につきこの砂時計が落ちるまで、持ち時間は無し。」

図師様：「砂時計一個？一手打つたら、ひっくり返す。そういうやうにやるか？」

盛野様：「そいつや。早く打つて相手に渡せば、相手の時間はより短くなる。」

最初は、中間の量を示す線のところに砂をあわせてある。そうはいつても、大駒を動かす時間が必要やから、どうやってもそれなりにかかるがな。」

図師様：「その砂時計のオノレの持ち時間が無くなる」とも、負けにつながるちうことか。

ふつ。そこまで考え込むよつなことは無こと思つがな。今回もウチの勝ちや。」

盛野様：「ふん。やつてみるとわからんや。」

本田も勝負が切つて落とされた。

やはり、図師様が優勢やつた。

図師様は、正午までに40連勝を重ねた。

団師様：「2六歩。今回は棒銀でいくぞー。」

農民達：「おーい。2六歩だぞー。」「いそげー」「置いたー！」

砂時計が係りのものの手でひっくり返される。

盛野様：「9一一番車。わははは。囲うぞ、囲うぞー！」

兵士達：「えいほ。えいほ。」「置いたーー。」「置いたーー。」

砂時計がもつかいひっくりかえる。

つつきー：「おらはもう駄目だー息が持たない。力が入りまへん。後を頼むー」パタン

団師様：「2五歩ーー！」

農民達：「はあ。はあ。置いたーー。」「置いたーー。」

盛野様：「8一銀。しもたー閉じちゃった。」「置いたーー。」

兵士達：「えいほ、えいほ。」「置いたーー。」

そつべい：「す、すまない。足をつてしまた。だ、どなたはんか交代を。」「パタン

団師様：「2四歩。銀の必要なとそつや。」

農民達：「せえ、せえ。置・い・たーー。」「

盛野様：「フ一金。まあええや。」

兵士達：「えいほ。えいほ。置いた！！」

なおよし：「お、おれももう無理。」パタン

この戦いは、夕方になつても続いていた。

図師様は将棋では圧倒的に勝つていた。

だが、大駒を運ぶ労力で、農民達の疲労は限界を超えていた。

その点、盛野勢は、決断の早さと、体力のある兵士達に助けられ、

前日の勝負と比べると雰囲気的には優勢となつていた。

とはいっても、盛野自身も度重なる敗戦による精神的な疲労が蓄積していた。

盛野様：「……（くわうわ。今日勝たねば、いつ勝つ。これほど負け  
るとよ。）……」

図師様：「……（粘り強い男や。そろそろ、退却してくれへんやろか。

森島様の言つ援軍はまだか？）……」

盛野様：「……（わては負けへん。）」今までやつて、逃げ出す腰抜け  
ではあまへん。

単なる将棋では無い。これは賭けなのや。双方の運  
命を賭けた。

あきらめなければ、いつか機会が来る）……

夕暮れになり、図師様も農民達も疲労していた。正直もう、頭が回つていなかつた。

兵士や盛野様も疲れていた。そのまんま、立つて眠れそつなくらいだつた。

そんな時、一の勝負の終焉は突然やつてきた。

盛野様：「4二玉。」

兵士達：「4・三・玉。」

：

おいた。

砂時計係り：コーン

その時、一匹の黒いものが、図師様のすぐそばで、蠢いていた。

図師様：「う、打ち歩詰みはだ、ダメだよね。」

あああ（（^▽^）（））

またわやんは、そのとき見た光景を一生忘れることができないでいる。

そつ、一匹のゴキブリが、図師様の手のひらの中で、潰れていたのだった。

農民達：「やん・よん・ふ～。　　おいた～」

へとへとこなつよつた農民達は、事態の理解よりも駒の移動を優先した。

かもりん：「あ、あれは。　一歩も。」

盛野様：「勝つた！　勝つたぞ！　」

兵士達：「ワ～！　勝つた。勝つたんだ！　　盛野様万歳！　」

盛野様：「お、お前達のお陰や。この勝負、心が折れそつこなることが何回もあつた。」

負け続けるのを耐えることができたのは、お前達の応援があつたからだ～！～（ノヽヽ）」

兵士達：「盛野様！　盛野様！　　盛野様！　」

呆然とする図師様と倒れこむ農民達。勝負はもう決したのだ。

盛野様：「ああ、稲穂村諸君。武装を解除して、投降してもうあつ。

」

図師様：「やうやう。あんはんの勝ちや。皆、槍を捨てまひよ。」

カラーン。カラーン  
竹槍を捨てる音がした。

森からの大きな声：「槍をする必要は無い……」

盛野様：「や。だれだ！」

森の中から、森島様と、出間様（元虚無僧）、元野伏の集団が現れた。

森島様：「ウチは、この村に雇われた浪人者。森島倫正と申す。後ろは、積藁の国の軍勢にござる。」

盛野様：「森島。ああ、名前は知ってるだ。

ああ、峯澤殿の部下やつたな。積藁の国と通じてている疑いがあつて首になつたちゅう。

なんでお前がここにいる？」

森島様：「今は、浪人者や。まあ、積藁の国とは密接な関係があるんやが。

昔の話はやめまひよ。

これは、積藁の国の軍勢や。今、積藁の国が古河茅の国に攻め込んであるんや。

田中様からは、伝令が行つていなかつたちうワケやか？」

盛野様：「初耳や。お前の嘘である？」「

森島様：「……（やはりな。）……」

「嘘でも何でも、この森に潜む兵が、急襲すれば、盛野様の首は飛びまつけど。」

盛野様：「何がええたい！」

森島様：「投降を願おう！ 盛野様殿。もつ、勝負はついた。小事に執着しきれ、大局で負けたのや。」

盛野様：「…くつ。」

なおよし…「おい…！ 森島様。 盛野様を逃がしてやつてくれ！」

森島様：「何？」

農民達：「助けてあげておくんなはれ…！」 「捕まえちやだめ…！」  
「殺さないで…！」

森島様：「え～」

井之川様：「そういひいや。逃がしてやつてくれんか。」

森島様：「嫌や。」

図師様：「ウチからもお願ひしまんねんよ。」

森島様：「みんな。 酷い。」

農民達：「お～に。お～に。」 「悪魔…！」 「天罰にあつちまえ…！」

森島様：「人間怖い。 ……（ ） ……。」

公文様：「ええやないか、森島様。あきらめん。」

森島様：「わかつた。」

農民、兵士一同：「ワーッ――良かつた――」歡喜の声が沸き起  
じる。

盛野様：「…」

盛野様：「かたじけへん。」の恩、必ず。」

稻穂村一同：「元氣でな～」「また来いよ～」

盛野様は、暗い夜道を兵士達とともに帰つていった。

森島様：「トーデ、団師様。一歩つて。ええ仕事しすぎだよ。」（  
、へ、#）」

団師様：「あれば、ちーとばかし疲れておつたのや。

あの、ヨキブリやえになれば。はよ、手を洗お。」

こつして、盤上の千本決戦と言われる名勝負は、盛野廠造の完全勝  
利に終わった。

盛野様と図師様の盤上の千本対決として世に伝わる迷勝負の決着がついた次の朝。

森島様、出間 新之助、頭領の公文・元野伏達、そうべい、なおよし、つつきー、大おじじ、金一じい、井之川様、まさちやん・図師様、恵向様、一同が会し、今後について話し合っていた。

なおよし…「…経緯は確かにわかつた。やけど、野伏を許す氣にはならん。」

つつきー…「おらの家族は、行方知らずのまんまや。返せ…お前らは何しに攻めて来よつた…！」

頭領の公文…「…。すまぬ。」

そうべい…「なんぼ謝られても、公文が関わつてへんといつても、許す奴やらなんやらおらへん。

「じないな」としても、許す」とやらなんやらありえへん。

野伏を許してやつて欲しいやらなんやらと。

森島様様。わしらの気持ちも考えとつただきたい。」

森島様…「うーん。心の溝は簡単に埋まるとはないやうつな。」

そうべい…「わしらとしては、野伏達の顔もみたくないのや。積藁の国に編入されたのなら、

伊波様の指揮に入れて、一度とこの稻穂村に入れてくれるな！」

森島様：「そうだな…。やうしてまうつか。」

図師様：「ああ、そろそろ説明してもらおうか。

ウチ達は、積藁の国の保護のもと、古河茅の国と戦つことになつてしまが、

当初の目的は、野伏退治や。

どうしてこないなことになつよつたのか。説明して欲しいね。」

森島様：「ウチは積藁の国の者や。

浪人として古河茅の国に潜入し、攻め込む糸口をつくる役割を持つとつた。

稲穂村の野伏退治を利用して、一揆を起こせや、民心を離れさせた上で、

攻めるひつ計画を立てた。稲穂村を利用したのは、否定はせん。

やけど、稲穂村のことも考え行動したつもりや。」

そつべい…「…」

図師様：「確かに、本日この時までの行動のよつけて説明がつぐ。ウチも知らんとその計画に組み込まれとつたのか。」

つつきー：「わしらは別に古河茅の国と戦いたかつたわけではおまへん。」

森島様：「せやけど、野伏の問題を解決するには、国境がある今の現状が問題なのや。

この稲穂村付近は、地理的に盗賊や野伏の巣窟になりや

すい。

それに、古河茅の国の政治が積藁の国に勝つひとは言えへん。

一言でいえば、ようけの人を見捨てる政治や。

野伏はまだまだ生まれるやううわ。

ウチは、古河茅の国は無くなりよつた方がええと思つと

る。」

なおよし…「それは道理や。古河茅の国が積藁の国よりがるることもわかる。

やけど、わしらはそれを望んでいなかつた。」

森島様：「沢山の村から、助勢が集まり始めとる。この村は一揆運動の中心や。」

「のうねりからは、簡単に抜け出せへんぞ。」

それに、積藁の国が負ければ、稻穂村も必ず焼かれる。」

つつきー…「それはわかつとるが。」

井之川様：「まあ、騙した森島様が悪いわな。

なんぼ野伏の問題を解決しても、稻穂村が古河茅の国と戦う理由にならん。」

森島様：「まあ、そつか。騙したことはずまぬ。せやけど、言つておつたら成功しなかつた。」

そうべい：「そないなこと、理由にならん。それに、道覚様の素性を知つとつたのなら、

それだけで野伏の問題は解決できたやないのか…」

森島様：「やうやううな。でも、やうする。稲穂村と積藁の国の軍勢は一連托生や。」

大おじじ：「やうやなあ。」これは一つ、稲穂村は一揆の中心にはなるし、積藁の国の助力はするが、

古河茅の国と戦わん。ちつのはどつか。」

やうべい：「やうだな。それくらにならばええかも知れへん。」

森島様：「愚かだな。」

なおよし：「何……もつ一回戻つてみる……。」

森島様：「愚かだと云つとるんだ……ちびつと上手くこつておるからつて調子に乗つて！」

なあんも犠牲を出せんと、成果だけ要求する。

オノレが傷つかず、どなたはんも傷つかず、

どなたはんかを傷つけず、何ぞを為そつとする。

そないなことできる筈ないやろ……やから愚かと言つたんだ！

そないな甘い姿勢では、みな。みな失つてしまふんだ……。」

まさかやんは、森島様の怒つた表情をみたのは、一度だけだったと時々思い出す。。

まさかやん：「……」

やうべい：「……やうまで云うのない、参戦するしかないか。氣は進まんがな。」

大おじじ…「確かに、一揆はどいつにもなりとこ」まあでござりしまつておるのや。

「この事実は確かや。稻穂村も戦つしゃうかいのやうひな…」

井之川様：「…（森島様。言いたいことはわかるが、農民達の士氣はあまりにも低い。

無理に、戦に連れていつても役立つとは思えん。理念だけで人は動かんぞ。）…」

森島様達が、盛野様を稻穂村から送り出したその頃。

田中様は、ともし火を見つめながら、物思いにふけつとつた。

田中様：「…（なんでやねんやううわ。毎日毎晩壹年中何ぞが足りまへん気がする。）…」

田中様は、幼少時から、武芸、軍学、儒学、万事にすぐれ、神童と言われとつた。

元服後も、優れた判断力、気性の好さ、みなに優れたその能力を発揮し、名声を得とつた。

特に、能力を重視する見田様が当主の座についてから、一気に家老まで取り立てられ、

古河茅の国に田中粧信ありとされるほどやつた。

だが、田中粧信は、それに満足感を覚えたことはいつへんもなかつ

た。

むしろ、ざらざらした気持ちだけが広がつていった。

田中様：「…（ウチの心はまるで灰だな。）…」

そんな気持ちになるのは毎晩のことやつた。

オノレと違う者、幸せそうな者は嫌いやつた。

そういう者は、利用できなくなるとすぐに世の中から消した。本人にもわからぬように。

そういうものを見ると、心が軋むような音がするのだ。

田中様は、公言したことは無かつたが、一つの考え方を持つていた。

「ほんまの計略は人に覚られてはならへん。ほんまの行動は人に気づかれてはならへん。」

これは、田中様が政治的駆け引きの中で学んだことやつた。

だが、計画と行動の中心となる、田中恆信の心は、  
ただ、虚ろだつた。

## 第2章 塀中からのお便り（後書き）

次回、奇妙な森野の剣。その秘密が明らかになる。

なんのことやらさうぱりわかりまへん。

### 第3章 道場からのお便り（前書き）

森島倫正は侍である。しかも、剣術の達人であつた。その過去が明らかになる。

コメデイ風、関西弁戦記。始まります。

### 第3章 道場からのお便り

森島様とその仲間達は、それぞれの胸にわだかまりを抱えながらも、稻穂村の農民と近隣の村からの加勢をとりまとめ、

稻穂村を出発し、古河茅の国を中心といえる城である古岩城に向かつた。

その軍勢は、稻穂村農民四十余人あまり、元野伏が二十余人程、近隣から集まつた農民も合計して、500人あまりだつた。

この稻穂村一揆隊と呼ばれたこの一隊は、各地の村から志願者を集めながら、進軍していた。

まだ戦いの前の、ある穏やかな日のことである。

井之川様：「とつりやあー！」

稻穂村一揆隊は、進軍を休め、急息をとつとつた。井之川様は、剣術の稽古をしていた。

まさひやん：「森島様。森島様も剣術はできるんか？」

「いっぺんも刀を抜いたトコをみたことないやんけ。」

森島様：「ふつ。甘く見てもうては困る。これでも無念流皆伝の腕前なのや。」

団師様：「無念流？？聞いたこともない流派や。どないな流派なのや？？」

「

森島様：「念流を窮めた鳴滝様ちう人物を知つておるか？」

図師様：「それは、聞いたことあるんやね。」

またひやん：「ウチもじつてまんねん。なんでも、幾多の戦いに身を投じ、

よつけ伝説を残した剣豪やね。」

森島様：「その鳴滝様が、幾多の反省点をもとこ、

晩年に編み出したのが無念流や。」

またひやん：「へへ。」

図師様：「初耳やね。ちーとばかし無念流とやらをみせて欲しこやな。」

森島様：「図師様め、その口ぶりだと信じてへんな。

無念流の凄さをちーとばかしだけみせてやひつわ。」

そう言つて、森島様は立ちあがつた。

刀をスルリと抜いた。

森島様：「無念流の構えの真髓は、その不恰好さにある。」

やひつわと、森島様は、

両腕を真つ直ぐ前方に伸ばし、腰を低く落とした。とこひつわも引いた。

田はつばの裏をしつかりと見つめ、つま先立ちし、真つ直ぐに伸ばした腕を、ワナワナと振るわせた。

井之川様：「なんちうくつぱり腰」

図師様とまちゅあんは唖然としていた。その無様さに。

森島様：「」これが基本姿勢。ほんで、次に基本技や。」

そう言つた瞬間

森島様は、速く、目を凝つほど速く、  
体を回転させながら、刀を前に打ち込んだ。  
まちゅあんは、その打ち込みに「風」を感じたのだった。

図師様：「凄いね。構えは油断させるためとこいつといひか。  
ほんで、すばやく打ち込む。」

森島様：「まあ、そないなトコや。」

この技にはある信念が込められてるんや。  
無様な格好は、油断させる意味もあるけれど、  
無駄な戦いを避ける意味もある。

何よりも重要なのは、「見る」「」と「見せへん」こと  
なのや。」

図師様：「よくわからんな。どつこいつとやね。」

森島様：「相手の構えと行動をよく見る」と。

ウチが見るとることを相手には気づかせへんよつこある。  
ほんで、ウチがすばやく打ち込んだときには、勝負は決

しどる。」

まちゅあん：「…あ。打ちこんだとき、刃が逆、峰打ちになつて

ねやべ。」

森島様：「よく気がついたな。」これであつとねんや。  
無念流の基本技は、峰打ちやから。  
無念流は、相手に氣づかれず、  
じなたはんにも氣づかれんと、勝負を決するのを善しと  
す。

その方が、「強い」かららし。

ただ、それは勝負といつより暗殺に近い。

それを嫌つた鳴滝様は、峰打ちを一番に覚える基本技と  
あらじとじ、

暗殺剣ではおまへんと伝え、

使い手が理念や心根を大事にするゆづ論したのや。」

図師様：「意味を聞くと納得するが、うへん。あの格好は遠慮したいな。」

またねやん：「ウチも無理や、」

森島様：「なんだなんや。みんな格好ばかり氣にしやがつて。

まあ、そうやううな。

でも、なりふり構わずやつまへんとでなくることもある

んだ。」

そつこつと、森島様は、刀を鞘に納め、  
少しだけと微笑みながら、髭を手で引っ張った。

鳴滝正邦の道場は、当時積藁の国を中心街、大門街のはずれにあつた。

鳴滝の道場からは、歴史に残る剣豪が何人も巣立ち、名声もあつた。そないな鳴滝様の心には、大きな悲しみがあつた。

峯澤少年：「オッス！」

峯澤少年は、となりの古河茅の国から遠路遙々やってきて、道場の近くに一人暮らしをしながら、道場に通つていた。

齡12の若さで、既に剣の強さでは道場内では並ぶ者はなかつた。周囲は、皆、免許皆伝も近いやう、剣で名が知られる日も近いやうと噂をしていた。

峯澤少年：「鳴滝様。何をそないなさびしそうなお顔をされどるのや？」

鳴滝様：「な。寂しそうな顔やうなんやうしておらぬ。ちーとばかし老けておるだけや！」

峯澤少年：「し、失礼したんや。稽古、おおきこー。」

そつこつと、峯澤様は小走りに道場を出て行つた。

鳴滝様：「やびしそうわ。か。確かにそないな顔をしどつたか

もしかんな。」

鳴滝様は、そうつぶやいた。

鳴滝様の悲しみの原因は、道場を廃立つていく生徒達が、命を落すことだった。

剣術を理解した強い者ほど、命を落す者が多かつた。  
命を落す者は、いつも、将来性を見込み一生懸命教えた生徒ばかり  
やつた。

鳴滝様：「……（剣の代わりに權を振り回して有名になりつたあいつも、

一撃必殺の剣を覚えたあいつも皆、死んでしまった。  
峯澤も、そないな風に死ぬのやううつか？……）

鳴滝様：「……（わしが剣を教えるのは善か悪か。

わしはなんで生き残つておるのか。）……」

そんなことを考えてばかりいたせいで、鳴滝正邦の皺は深くなつて  
いった。

鳴滝様は、優秀な峯澤少年の将来を考えるたびに、さりと心が重く  
なるのやつた。

ある夕方、峯澤少年は剣術の稽古を終え、帰宅しようと道場を出た。道場の前に、見慣れない、みすぼらしい格好をした少年が立っていた。

峯澤様：「道場に何ぞ用やうか？」

森島少年：「拙者は、森島倫正と申す。」の道場に入門させていただきたく、参上仕つた。」

入門希望ちうので、峯澤様は、森島少年を鳴滝様のトコまで連れて行つた。

鳴滝様：「困るわ。入門するには、そなたの親が金子を払う必要があるの。」

申しわけへんが、帰つてお父上に相談なされよ。」

だが、森島様は帰らない。

森島少年：「ウチの父は、戦争から還りず。そのため金子やうんやらは無い。」

鳴滝様：「それならば入門はできぬ。」

森島少年：「侍なら、一本の剣で生活するのが道理やう。」

金子を払えねばならんと鳴滝様は口にするのか…。」

鳴滝様は顔を真つ赤にして叫ぶ、森島少年を見て、笑つてしまつた。なんて、必死なんだう。そのせいで、少しだけ、意地悪をしたくなってしまった。

鳴滝様：「ここは道場や。金が無くては道場は維持できません。

それこ、ここに通う生徒は、皆、金を払つておる。

やから、金の無い者には教えられん。

やけど、剣術の基本技を、一回教えただけで完璧に覚えることができたなら、

正規の稽古が終わった後、わしが剣術を教えてやつてもよからう。

森島少年…「よし、その基本技とやらを教えていただこうか…！」

森島少年…「鳴滝様、ほんまにこないな格好なんやうか？？」

鳴滝様：「やうや。まず腕をピンと伸ばせ、ほんで腰を引ついて、

田は、やうやな鐔の裏を見つめよ。

そうした後、手と足を、ワナワナと振るわせるのや。それが基本姿勢や。」

森島少年…「…やうやうやうか？」

鳴滝様：「やうや。さうやさうや…」

峯澤少年：「……（大の大人が何をしとるんだか……）……」

鳴滝様：「この構えには、意味がある。まず、敵を油断させる。それとだな、え~と、敵をよく「見る」ことや。

次に出す一撃で勝負を決める」ことができるよ。ほんと、敵にオノレの手を読ませるな。そのために、ワナワナと震えるのや。」

森島少年：「はい！」

鳴滝様：「その基本姿勢から、基本技や。回転して、素早く峰打ちを打ち込め！」

森島少年：「あ、あの~。」この姿勢では、手足に力が入り過ぎて、できませ~ん。

（ ^\_\_^ ）」

鳴滝様：「そうやな、やから、腕は力をぶちこむが、手の指と肩の緊張は解け！

足の裏と親指、足首の緊張は解くが、その他の部分に力を入れて足を震わせよ。腰も、胴体もその姿勢では動かしにくかうつわ。やけど、動かせるのと「だけで体を回せ……。そうすれば、必殺の峰打ちとなる。」

峯澤少年：「……（もつともうじこじとを。あこつもかわいそつ。）

「……」

森島少年：「は、はい！やつてみまんねん！」

ブルブル、ワナワナ

クルリ！…ビューン

鳴滝正邦は、その剣の風を感じた。鳴滝様も峯澤様も信じられなかつた。

その太刀筋の鋭さと力強さは尋常ではなかつた。凄烈な氣を感じた程だつた。

鳴滝様、峯澤様：「…（え～）…」

鳴滝は、森島少年の中に新たな光をみた氣がした。  
普通と異なる方向に鍛えてみたらどうなるか。

死んでしまつた教え子達の顔が、ふとよぎつた。  
何か新たな道が見つかるかもしれない。

鳴滝様：「「ホン。明日から、この正規の訓練後、  
この時間くらいからお前の稽古をつけてやる。」  
もちろん、金はいらん。

今日教えた技を、千回は練習しておくれ！」

森島少年：「はい！…（〃^ ^〃）」

鳴滝様：「今日お前に教えた技は、… タブン… わいもよーし  
らんが、

無念流 基本技 峰打ち と言つわ。覚えておけ！

森島少年：「はい！」

峯澤様：「…（ああ、なんて口からでまかせや）…」

鳴滝様：「…（なんて冗談が通じない小僧や。これは教えがいがありません）…」

「（。、。）ノ

毎日の夕方の稽古が楽しみになった。

鳴滝様：「…（さあ、今度は何を教えてやるつか。）…」

鳴滝様は、峯澤少年を自身が受け継いだ念流の後継者として、オノレの経験をみな詰め込み育てることにした。

そして、森島少年は、実験的に、思いつきのまんま、適当な方向性で育てることにして、それを適当に無念流と名づけた。

森島少年：「鳴滝様～。この構えしかないんか～。

次の構えを教えておくんなはれよ～。」

鳴滝様：「無念流には、構えは一つしか無い。諦めよ。」

森島少年：「…」

峯澤少年：「構えるちつ」とは、攻撃を待つちつ」とや。

後手に回りやすい。やから構えは不要や。」

鳴滝様：「そういうことや。無様なその構えは、相手の戦意をくじき、不意を突くためのもの。そういう小手先のものは、幾つも必要なからうわ。」

平和だつた。樂しき日々だつた。

鳴滝様：「今日は2人新たな技を教えてやううわ。

まづ、前教えたように、相手にピッタリ身を寄せ。そつすると、敵は刀を使えなくなる。やってみよ。」

森島少年と峯澤少年は立ち上がり、ピッタリ体をくつつけた。

鳴滝様：「峯澤、そこから左翼肩を当てる感じで、森島の心臓めがてぶつかれ！－臆するなよ。」

峯澤少年：「はい！」

峯澤少年は鋭く、森島少年に体当たりを食らわせた。

森島少年：「あわわわわわ－！－！」

森島少年は吹っ飛んでいった。

鳴滝様：「峯澤、刀が無くてもこれで敵を倒せる。

一撃必殺の技となるように鍛錬せよ－！－！」

森島少年：「では、ウチも。」

鳴滝様：「駄目や。森島に教える技は」の技では無い。」

森島少年…「は、はー。」

鳴滝様：「先ほどの同じよつて、身をへつつかよ。」

森島少年…「はー。」わざわざね。」

鳴滝様：「ほなうめず、親指で、峰澤様のわき腹をつつかー。」

つねつん。

峰澤少年…「…（）しおぐつた（）…」

鳴滝様：「相手が堪らず動いたら、その動きととむべー…。」  
「び  
よーへん」と。」

森島少年…「びよーへん…。」

鳴滝様：「それで、相手の動きを制せー。制したらー。」

「うひや、うひやね」と叫びながら猛然と身を駆せよー。」

森島少年…「うひや、うひやね」（。）（。）（。）（。）

峰澤少年…「…（）（）（）…」

鳴滝様：「…それだけや。」

峰澤少年…「…（）…」

森島少年：「で、でも、」れでは敵をやつつけへんや。」

鳴滝様：「森島様よ。よく聞け、無念流の理念は、敵と戦つて「負けへん」と「倒す」とは無い。

死なない」と。負けんと、次の展開を切り開く」と、それが大事なのや。

敵を倒そ「い」と、無駄なことを考える暇はないぞ。」

峯澤少年：「こつもおっしゃつこと違つてゐる…」

鳴滝様：「峯澤に教えるのは、敵を倒す道や。

やから、敵を斬る、倒すのが大事なのや。

逆に、敵を倒すのに役立たぬものはみな無意味や。

流派が違えば、考え方も異なるだ。

森島少年：「ほなり、なんで逃げる技を教えてくれへんのや？」

鳴滝様：「逆に聞くが、侍と、農民やあきんどとの違いはなんやと思つ？」

森島少年：「刀を帶びておるかおらへんか。やろか？」

鳴滝様：「ふふ。ちやうわ。刀を落としても侍は侍や。峯澤様はどひ思ひつ？」

峯澤少年：「命を賭ける気持ちがあるか。死ぬ想いがあるかどつか。でつしゃろか。」

鳴滝様：「惜しいな。やけど、農民も天候を命がけで読み、

あきらんども利益のために命を賭け、死ぬ想いで臨む。」

鳴滝様：「わからんか。そりやな。もし、侍同士が対決して、負けた方はどいつなる。

もし、合戦をして負けた軍勢の将はどいつなる？」

峯澤少年：「ほほ間違いなく、死にまんねん。」

鳴滝様：「そりやな。侍の場合のみ、「負け」が死に直結じるのや。

農民でもあきらんども、「負け」ても即死ぬ」とは少ない。

やけど、侍はちやうわ。」

森島少年：「なんでやねん、

それがなんで逃げる」とを教へん理由になるんや？」

鳴滝様：「逃げるちうひとは、「負けた」ちうひとや。

それは本当は「死ぬ」ことにつながつるはずや。

もし、ほんでき延びてもそのよつた強さではすぐに死ぬやう。

わしは、それではもつ侍では無こと思つんや。

やから、逃げるよつな技は無念流には存在せんのや。」

森島少年：「負けへんためなら、相手を倒せばよいの。」

鳴滝様：「そりやな。「負けへん」ためには、

「相手を倒す」か、「それ以外」の2通りの方法がある。相手を倒すことに特化したのが峯澤様に教えとる念流や。ほんで、「それ以外」に特化したのが、無念流なのや。

逃げず、殺さず、只守り、唯一の攻撃は峰打ちだけ。  
そのうち打開策を見出すのや。」

森島少年：「そないな深い考えがありやつたひづワケやか！」

鳴滝様：「（今思ついたんやけど、そないな感じだ）…」

峯澤少年：「なるほど。」

こうして、道場での楽しい時間は過ぎていった。

森島様が入門して1年が経つた。鳴滝様から教えられたことを忠実に守り、鍛錬を積んでいた。

そななある夕方。

鳴滝様：「峯澤、森島と手合わせしてみよ。」

そう言つて鳴滝様はにっこりと笑つた。

森島少年は、いつものように腰を引いて手足を震わせる無様な構えをした。

峯澤少年は中段に、ただ自然に、ただ自然に木刀を構えた。

鳴滝様：「始め！」

峯澤少年は、するすると、自然な足取りで間合いを詰めた。

ヒコッ！

森島様は回転し峰打ちを放つ。だが、峯澤少年は容易く避けた。

峯澤少年…「…（あのよつなええ加減な指導では、オラには勝てぬ。だが、あの怪しげな太刀筋、油断できんぞ。先手を取り、制す！）…」

峯澤少年も「ワッ！」と声を掛け、フロイントをかけてから打ちかかる。

だが、森島少年は動じず、「ピリッ…！」と叫び、真つ直ぐに木刀で峯澤少年の顔を突いた！

峯澤少年も堪らず後ろに下がる。

峯澤少年…「…（じうする。強く打ち、あいつが受けたトコを突くか。）…」

峯澤少年は猛然と踏み出した。そして、胴を思い切り木刀で薙いだ！森島様は受けない。

次の瞬間、森島様は横に倒れ込んだ！

峯澤少年…「…（まよい。手）たえが無い！）…」

峯澤少年は氣を失い倒れた。

峯澤少年は不思議で仕方なかつた。なんでやねんオノレが森島に負けたのか。

道を歩きながら考えた。

峯澤少年：「…（森島様の無念流は、鳴滝様様の思いつきや。

それに、もしそれが理にかなつた強い流派だとして

も、

毎日道場に通い人一倍稽古しとるオノレと、  
夕方だけ稽古する森島とでは差があるはずや。  
そもそも、森島様は剣の道に入つて1年しか  
経つておらへんではおまへんか。）…」

納得できなかつた。

峯澤少年：「…（森島がどうして勝つたのか…。調べてみなければ。  
）…」

翌日、峯澤少年の姿は、大根畠の隅にあつた。

峯澤少年：「…（森島は何をじとるのや。）…」

農民のおじはん：「毎日ありがとな〜。終わつたら、大根一本やる

でな。」

森島少年：「いえ、剣の修行ですから。」

そういうと、刀を抜き、大根の葉に向かって刺した一刺して刺して刺しまくった。

農民のおじはん：「ほんに器用やな～これで虫食いもなくなるわい。」

「

森島少年：「侍やひから当然や。」

峯澤少年：「なるほど～、こんな特訓を。」

今度は、森島は饅頭屋にいた。峯澤少年は中を覗き込んでいた。

饅頭屋はん：「毎日ありがとうね。たすかるわ～

できた餡子、ちびつと分けてあげるから。」

森島少年：「いえ、修行ですから。」

森島少年は刀を抜くと、餡を煮てているなべに突っ込んでかき混ぜはじめた。

峯澤少年：「…（…その刀、ちゃんと洗つたか？？）…」

饅頭屋はん：「おばはん、いつも思つたやけどね。」

刀やなくてへラを使って欲しいなって。」

森島少年：「ウチは人を斬つたことはない。心配ご無用。鍛錬のためなのや。」

汗びっしょりになつて力いっぱい、餡の入つた大なべを刀でかき混ぜていた。

峯澤様：「なるほど〜。これで体力を。」

次に、森島少年はお寺に入つていった。

お坊はん：「信心深いのつ。仏様も喜ぶて。」

森島少年：「いえ、剣の修行や。」

森島少年は、近くに置いてあつた薪を手に取ると、その薪を刀で斬りつけた。

パツ。ズシャ！

あつといつ間に、木彫りの地蔵菩薩像が出来上がりつていた。

森島少年：「これを奉納致しますわ〜。」

峯澤少年：「なるほど、なるほど。神仏にも祈願。精神統一か。」

時は、いつしか夕暮れになつていた。

しばらくして、峯澤少年は森島少年に勝つことができたのだった。

そないな楽しい日々も過ぎ去り、峯澤は元服し、故郷である古河茅の国に帰つた。

森島も寺社奉行として働き、道場にもあまり顔を出さなくなつとつた。

鳴滝様：「やびしいのつ。まあ、あの「一人に教える」とやらなんやらもう残つてはおらへんが、まるつきし別のことを教えたあの2人。どうなるか楽しみや。」

老境を迎えた鳴滝正邦、その最期は突然やつてきた。

その日、鳴滝様は、剣術の指南のため積藁の国の伊波様の屋敷に出

向き、

道場のある白毫に帰つておつしていった。森島は、鳴滝様に付き添つていた。

鳴滝様：「お前が寺社奉行とはのう。」

森島：「あるお寺に毎日木彫りの地蔵様を奉納していたのだ。」

そのお陰で、お坊様が推してくださつたのや。ありがたいことや。」

鳴滝様：「こないんでも、ええのかのう。」

峰澤のようにシャツキツとした奴ならわかるが……」

暗い影が夕闇に潜んでいた。その影は近づいてきた。

鳴滝様：「む。何者や……」

木陰から大男がすくつと立ち上がつた。

有北敏郎：「わしは、有北敏郎と申す。昔、お前に負けてからずつと鍛錬しておつた。」

勝負しろー！鳴滝。命を賭けて勝負しろー！」

森島：「ウチが戦いまひょか？」

鳴滝様：「いや、わしが殺る。さがつておれ。」

鳴滝様は太刀を抜いた。

有北敏郎：「前と同じだと思つなよ……」

鳴滝様：「……（思つてなど無い。わしはもつ老いた。  
わしが勝てる筈があつつか。やけど……）」

有北敏郎は素早く切り込む。

有北敏郎：「この素早き打ち込みを見よ！」

鳴滝様：「打ち込みに早いもとろいも無いわー馬鹿馬鹿しい！」

しかし、言葉と裏腹に、鳴滝様の体勢は崩れていった。

有北敏郎：「ふん！さあー死ね！！」

森島様は、有北敏郎の刀が鳴滝様の腹を切り裂くのを見た。

有北敏郎：「ぐ、ぐわっ！」

だが、有北敏郎も又、頭上から太刀を受け、倒れた。

鳴滝様：「わ、わしも遂に終わりやな。」

鳴滝様：「森島様よ、今、なんで刀を避けんかったかわかるか。  
人にはオノレが傷を負わなければ、何ぞを成せへんこと  
があるんや。」

避けてかわすことは容易いが、ほなら勝てへんて……ゴハ  
ツア……」

森島様：「わかりましたんや。わかつたから、もうしゃべりまへん  
で。」

鳴滝様：「お前には、「負けへん」剣術を教えた。

やけど、それだけでは未完成だと思つたや。

…ハア… 「負ける」ことは「死ぬ」ことや。死ぬべきや。

やけど、死ぬことは「負ける」ことやひつか。：

…わしは勝つたのや。やから、、、、泣くな…」

やつ言つて、鳴滝様はこつこつと笑つた。森島は死を理解し、さめやめと泣いた。

鳴滝正邦はこの世を去つた。

鳴滝の葬儀が終わり、

森島は剣の稽古を辞めてしまつた。

森島様の頭には、常に剣術のことがあつた。

森島様：「…（ウチの剣術に足りまへんもの）…」

死に臨んでも「勝つた」とつて笑つた師の顔が浮かんだ。

森島様：「…（どうすればいい。どうすればええやうのやんか。）

…」

森島は、本当は知つといた。

鳴滝正邦の教える「無念流」が、

生徒が死ぬことへの悲しみから生まれた後悔の剣術だということを。

その剣術が、現実には無理があることも知っていた。

鳴滝もそのことは十分わかつていた。

無念流ではどうにもならへんことが沢山ある」とを。  
「負けへん」でも逃げない、死はない、殺さない。それは只の夢だつた。

でもその夢を見ていたかつた。だから、森島に夢の剣術を授けた。

森島：「…（無念流か。師匠の思い、痛いほどわかる。）…」

死を避け、無様に生き続ける剣術。理想だけの剣術。

森島：「…（それでも、大切や。）…」

死ぬことは負けることやうか…その言葉が森島様の頭の中を巡つとつた。

森島様の心は晴れず、無為に時が過ぎていつた。

あるとき、ある寺で、屏風をみた。

その屏風には、「懸崖撤手」という題で、絵が書かれていた

森島：「おっ。これは。なんて酷い屏風だ！」

懸崖撤手。崖から落ちそうで手だけでぶら下がつていい状態から、手を自分の意志で離せ。という意味である。

絵には、苦しそうな顔をして崖にしがみつく人と、  
楽しそうな顔をして崖から落ちていく人の姿が描かれていた。

落ちていく人の笑顔と、鳴滝様の笑顔が重なつて見えた。

森島：「なんて自由なのや。ははつ。死んでしまつではおまへんか。

」

森島の心の中で何ぞ弾けた音がした。ほんと、囁りがすーっと無くなつていつた。

森島：「やうか。「負けへん」とは究極にせりつことなのや。生きて、無様にも生きて、守り通すことは無い。」

森島：「オレはやるべー！全部自由にぶつ壊してやるべー！自由だ！捨てるんだ！」

森島は笑つた。考えこんでいたオノレが馬鹿馬鹿しく思えてきた。

そして、静かに師を思い出した。

( ) ( )

森島は、この屏風の製作者に、賛辞の意味を込めて手紙を送つた。

「お前の絵には発見が無い！」と。

返事にはこう書いてあつた。

「やつたら、お前が書いてみろー！」

森島は、屏風に蝉の抜け殻を沢山貼り付けた。

そして、じつ書いた。

「蝉は何匹いるでしょ？？」

森島：「…（抜け殻を脱いだ蝉が）ここ一匹いるぞー」…」

その翌日、森島様は積藁の国伊波様の命令を受けて古河茅の国へ旅立つた。

古河茅の国の中田様に仕えている峯澤の元にて、積藁の国の間者として潜り込むために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7173y/>

---

一人のサムライ@関西

2011年11月23日15時53分発行